

[共同研究：限界集落に暮らす人々の医療・介護といきがい]

限界集落の高齢者のいきがいと介護

石 田 易 司
小 柳 敬 明
川 井 太 加 子
福 山 正 和

間崎島と限界集落

日本社会における高齢化の新たな課題

日本社会は1994年高齢化率14パーセントを超え、WHOが言う高齢社会に入った。その前、1989年にはこうした高齢化を見据え、厚生省（当時）は特別養護老人ホーム・デイサービス・ショートステイなどの施設の緊急整備、ホームヘルパーの養成などによる在宅福祉の推進などを掲げた高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略（ゴールドプラン）を制定し、97年には介護保険法を成立させ、2000年にこの法律に従って社会的に介護する仕組みが出来上がった。

それまでの日本の介護は家族介護が中心で、しかも妻や娘、嫁など、女性による介護が当然のこととされ、女性の社会進出を妨げるなどの弊害があった。また、核家族、少子化、晩婚化など家族そのものが形を変え、縮小傾向にあったため、家族で担う介護に限界が見えてきた。そうした家族の変容に伴って、地域社会その物の関係性も変化してきている。

戦後の日本社会は、そうした家族や地域による介護が担えなくなると、特別養護老人ホームやいわゆる老人病棟など、福祉・医療の施設が介護を担っていた。しかし、社会は施設福祉から地域福祉・在宅福祉へと大きな流れができ、21世紀を前にした社会福祉の基礎構造改革や2000年6月の社会福祉法の施行で、その流れは決定的になった。

介護保険ができるまでには介護の内容や個人の負担額、もっと根本的な保険制度の在り方など、様々な混乱があったけれど、2012年現在、これで十分ということにはならないが、つまり、財源の不足や介護内容の質の低下など、まだまだ増える高齢者数、つまり介護量の増大への対応に不安は残るけれど、これまで手にすることのなかった社会的介護のありがたさを、今、私たちは実感している。

こうして、日本社会全体の高齢者介護のシステムは一定の安定を見せているけれど、介護

格差という新たな問題が出てきた。有料老人ホームでも個人の介護者でも自由に使えるお金持ちとホームレスや無年金者との経済格差はそのまま介護格差になる。家族と同居する高齢者と一人暮らし高齢者の不安の差も大きい。そして、さまざまな担い手の確保しやすい都市と、フォーマルな供給量も、インフォーマルな支援量も圧倒的に少なくなってしまった農山漁村との格差もその一つである。農山漁村の中でも「限界集落」と呼ばれる産業構造の変化によって経済的な問題が若年層の流出を産み、高齢化率の異常に高くなってしまった集落の介護や、残された高齢者の生きがいの問題をここでは取り上げてみようと思う。

限界集落

高度経済成長がいわゆる「バブルがはじける」という形で終焉を迎えた1990年ごろ、当時高知大学教授の大野晃が新たに作った「限界集落」という言葉、さらに「消滅集落」という言葉は衝撃的だった。後に2007年、宮崎県知事に就任した東国原秀夫が「限界集落という言葉を使わないで」と訴えたほど、日本全国に蔓延した現象だ。

高度経済成長の終焉、高齢社会の登場と時期を同じくして、全国の農山漁村では若者が村を離れ、高齢者だけが暮らし、買い物や交通などの生活の基盤が破壊され、祭りや自治会など共同体としての形を成さなくなり、2003年から2005年にかけてピークを迎える「平成の大合併」がそれに追い打ちをかけることになって、日本中で限界集落化が加速することになる。つまり、合併した市町村の中心部に人が集まり、周辺部の過疎化がますます進行し、医療や介護の面でも取り残された集落が全国一斉に出現したのである。2006年の国土交通省の調査によると、全国の約1500の市町村のうち775市町村が過疎法に指定されており、その全集落62273のうち、12.7%にあたる7878集落が限界集落であり、1990年の調査から15年間で191集落が消滅しており、今後10年以内にさらに423集落が消滅すると推定されている¹⁾。

また2009年の報告では、この消滅の可能性の高い423集落が2600に増えている。しかし、この限界集落の住民の9割は定住志向であり、過疎集落を抱える自治体は財政力が弱いことも報告されている²⁾。つまり、限界集落の住民が死ぬまでそこにおり、それを支える自治体の体力は残っていないのである。今回取り上げた志摩市の場合も、2005年の合併後、市域全体の人口は減少し続け、担当課の係員も、離島に対して何も打つ手はないと言っている。

間崎島

三重県志摩市和具にある間崎島も典型的な限界集落の一つである。間崎島は英虞湾の中央部に浮かぶ人口約100人の島である。本土の賢島から3キロ、約15分の海路である。周囲7.4キロメートル、面積0.36平方キロ、最高標高18.5メートルで、海岸の一部を残してほとんど平野部はない。島の中央部を走る道路を歩いても15分もあれば端まで到達できる小さな島で

1) 国土交通省調査 2006

2) 国土交通省国土計画局過疎集落研究会報告 2009.4

ある。

歴史を振り返ってみると、戦乱や野盗の出現で生活困難者を生み出した室町時代の1532年に、前島半島中央部の片田（当時は矢納村）から4所帯が初めて移住³⁾。

現在も島民の7割が「岩城」「山本」の2姓で占められることなどから、長期にわたってこの一族だけが島に暮らしていたと想像できる。

明治になって1893年、間崎島の向かいにある多徳島で御木本幸吉が、真珠の養殖に成功。間崎島でも真珠の養殖を始め、戦後の最盛期には人口も増え、最大668人が記録されている。それまではイワシの大敷漁（定置網。カツオの一本釣りの餌にした）と本土の鵜方浜や大崎での舟渡り農業（間崎島には田んぼがないため、手漕ぎの船で集団で本土に渡り、米作を行っていた。戦後の高度経済成長期、リゾート法などで観光開発が盛んな時に観光業者に土地を売却し、ホテルやキャンプ場になった）で生計を立てていたらしい。



間崎島の変遷

戦後、真珠の養殖で大成功を取めた間崎島は今も残る約100戸の住宅に最大668人が暮らしていたと志摩町史は記録にとどめている。

3) 間崎ものがたり 2005 著者不明（私たちが間崎島を訪れた時、間崎島総合開発センターの事務所に残っていたワープロ打ちの資料に、志摩町片田にある三蔵寺の「三蔵寺世代相傳系譜」にこの記録が残っているという記述があった。

	1955年	1965年	1975年	1985年	1995年	2005年	2010年
世帯数	105	107	105	95	85	78	74
人口	668	585	383	296	225	192	136

このように、下表に示す真珠の売上高の低下にともなって、人口も急激に減少していく。

また、住民登録上の人口は2010年136人だが、私たちが見た限り、100人前後でしかない。志摩市介護保険課長が介護保険運営上の必要から、2010年7月に、ほぼ1か月毎日島に通って、全戸訪問したが、住民登録数は65歳以上の高齢者数101人、実際に居住していないことが判明した数、10人、さらに調査ができた数83人で、101人と83人の差の18人の中の10人を除いた8人は、いるらしいが会えなかった人と、会えたけれど、回答してくれなかった人、回答できなかった人だという。つまり介護の必要などで、島外の同じ市内の子どもたちの家で介護を受けている人、特別養護老人ホームなど施設に入っている人が1割以上いるのである。

また、若者たちもこの島には暮らしていない。私たちが知る限り、中学生の兄妹2人だけがいる。もう一組、大学や専門学校在学中の兄弟が住民表を残したまま島外に出ていることが分かったが、その次の年長者は中学生兄妹の両親が40代半ばでいるだけなのだ。

当然小学校は2008年、兄妹の兄が卒業した時に閉校になり、妹は最後の1年を船で本土の和具小学校に通った。最大100人の子どもたちが通っていたのに。保育園も当然閉鎖になって、その後デイサービスセンターとして活用されていたが、そのデイサービスセンターも2011年春、閉鎖になった。

高齢者の数も減ってきているが、それより、昼間の介護だけではこの島に残ることができないのだ。島のお年寄りを見る限りとても元気だ。つまり、元気でないとこの島では暮らせないのだ。

たとえば、中村城子さんは92歳。今も元気に老人クラブのカローリングチームで活躍するし、週に1回程度、自分で船を操って本土に買い物にも行く。ただし、城子さんが舟を出すと、海岸にいる島民はみんな仕事の手を止めて、対岸の賢島に着くまで見守っているが。

その城子さんの体調が悪くなり、2010年2月、徳島市にいる長男が彼女を引き取っていつ

間崎島の高齢者数の変遷（市役所調査による実数）

	65歳以上を含む世帯数	男	女	合計
2006年	72世帯	53人	69人	122人
2007年	69（うち一人暮らし14人）	52	68	120
2008年	69（17人）	52	66	118
2009年	68（19人）	49	66	115
2010年	65（20人）	44	58	102

た。体調不良の原因は便秘だったのだが、それでも医療のないこの島では不安でいられないのだ。彼女はこの島で生まれ、結婚し、島から出て暮らしたことがないと言っていたが、90歳を超えて初めて都会で暮らすことになったのだ。

間崎島の限界状況

このように、高齢者を含む所帯数も人口も年々減少している。そして、一人暮らしの数が増えているのである。

小学校、保育所、デイサービスセンターの閉鎖は先にも書いたが、この島では夜間の介護は今までもなかった。若者と一緒に暮らしているのならそれも可能かもしれないが、一人暮らしの高齢者が20人を超えた今、元気でなければ、島では暮らせないのである。

医療も同様だ。歴史上お寺がないのと同じように、医者がこの島で開業したことはない。現在、月に一度、志摩市の中心の鶴方の開業医がボランティアで訪問診察をしてくれている。患者はほとんど同じ顔ぶれなので、金曜日に電話をして様子を聞き、薬を用意して日曜日に診察に来てくれるのだ。多くの島民は市が船賃を補助してくれるのを活用して、月に何度か、本土に通い、診察と買い物一度に済ませてくる。どちらにしても、いざというときには間に合わない医療である。

島には自治会が所有する救急船がある。

以前、知り合いの女性がくも膜下出血で倒れたことがある。救急船はあったけれど、書きづらいが、体重が80キロもあったため、高齢者ばかりの島ではその救急船まで運ぶことができなかった。仕方なく、119番で対岸の賢島まで来てもらった救急車の隊員をその救急船で迎えに行き、救急隊員に船に乗せてもらった。

こんな風に、日常的にも、緊急時にも、安定した医療がないのが現状だ。

商店は郵便局と酒屋とよろず屋がある。しかし、酒屋もよろず屋も店主は80歳を過ぎ、いつ店を閉めるかが島民の話題になるくらい。また、置いてある商品も仕入れが簡単で、保存の可能なものが少数あるだけ。暑い日にアイスクリームを食べたくても店には置いていない。船を使つての仕入れが難しいのである。日によるのだろうが、ビールも30人ほどの大人が酔えるほどは置いてなく、私たちが調査の夜に買いに行っても、これで全部と言われることがよくある。

肝心の足になる船は、志摩マリンレジャーという企業が市の補助金を受けて毎日9便を確保している。しかし、終発が和具発17時05分、賢島発17時30分では、実際に企業で働くとか、学校でクラブ活動に熱中するとかはほとんどできない状態である。

中学生のY君はラグビー部に入っていたが、いつも途中で抜けていかなければならないことが嫌だと言っていた。高校のクラブ活動は絶対にできない。家に帰るといつも兄妹二人で、遊び仲間もない状態だ。彼は小学校からずっと二人だけだから、それが普通だと言っているけれど。

自治会の役員のなり手もない。老人クラブは食事会やカラオケクラブの会をしているが、参加する人が限られてしまっている。ゲートボール場があるけれど、使う人もいない。

こんな風に間崎島は子どもにとっても、社会人の大人にとっても、高齢者にとっても、当たり前で暮らすことは全くできない状況にある。10年後のこの島はどうなっていますかという質問に、ほとんどの人は消滅と答えざるを得なかったのである。

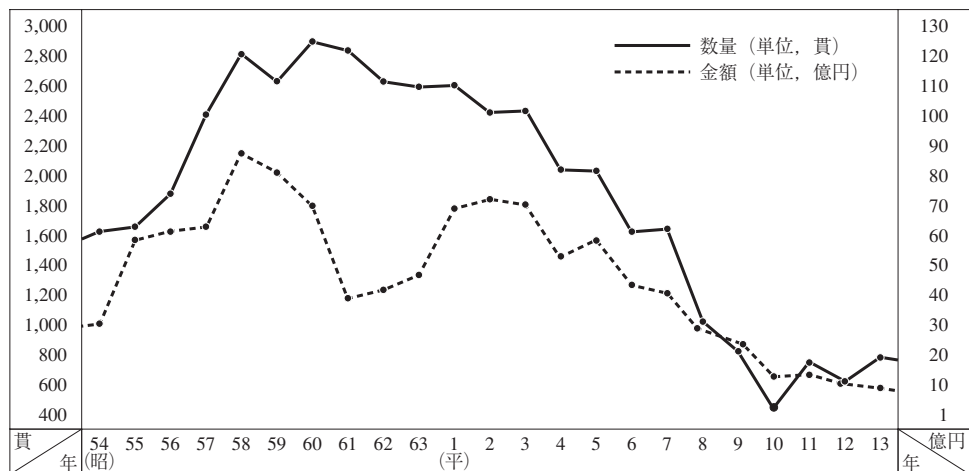
限界集落に至る過程

間崎島は1960年前後、真珠の養殖で本当に豊かであった。伊勢・志摩地方の人はこの島の住民の半数を占める「岩城」という苗字を聞くだけで、お金持ちだという連想をした。神話はいくらもある。一軒あたりの電話の保有台数が日本一だったとか、伊勢税務署管内の長者番付の上から10番までを間崎島の人が独占したとか。また、英虞湾の中で、国有地で水産庁の真珠研究所のあった多徳島のほか、間崎島だけが完璧な護岸ができていて、また、島の中央部を貫徹する道路は、本土の登茂山から橋をかけた時に必要だからと、みんな島の人がお金を出し合って作ったのだとか。

そんな間崎島が過疎の集落になった原因は、真珠産業の没落と観光産業の衰退にある。

下の図は、この間崎島を含む志摩町（当時）の真珠の生産量と売り上げの推移を表すグラフだが、1955年から60年ころをピークに、生産量も売り上げも見事に下降してゆく。

原因は狭い英虞湾内にあまりにもたくさんの養殖いかだを浮かべたために、また、観光が盛んになり、英虞湾の周辺の人口が増え、海水の汚染が進み、真珠母貝が取れなくなったこと、湾内に毒性のあるプランクトン「ヘテロカプサ」が発生したり、貝の感染症が出たりして、収穫量が減ったことと、それを予測して、英虞湾内の真珠養殖業者が世界中のきれいな



志摩町の真珠の生産量と売り上げの推移⁴⁾

4) 志摩町史

海を求めて、中国やオーストラリアなど、また、日本でも愛媛県や長崎県などで、真珠養殖を始め、世界中の真珠の生産量が飛躍的に増え、当然、英虞湾の真珠の価値の低下が起こったことだろう。

同様に1970年ごろから、島では民宿やホテルなど観光業にも力を入れたしたが、バブルの崩壊とともに観光業もすたれてしまった。最盛期20軒を越す民宿が間崎島にもあったが、今も年間を通して開業しているのは1軒だけになってしまった。

産業の衰退に伴って、まさにこのグラフ通り、人口も減って、高齢者だけが暮らす町になってしまっている。

今では、回答を得ることのできた島の83人の高齢者のうち77人が国民年金を受給している⁵⁾（少数ではあるが、少し会社勤めをしていたり、真珠養殖を会社組織でしていた人がもらっている厚生年金との格差も深刻であるし、この島では死ぬまで現役で、多くの人はまだ真珠養殖、海苔養殖に従事して、多少の収入を得ている人が43%もある）。

インタビュー調査 間崎島高齢者の「いきがい」について

高齢者のいきがいは、多くの先行研究がされており、いきがいと言えば高齢者が連想されるまでのテーマとなっている。その中で、いきがい（生きがい）とは、「生きる張り合い。生きていてよかったと思えるようなこと」（広辞苑第5版）、「生きるに値するもの。生きていくはりあいや喜び」（大辞林第2版）と定義されている。高齢者は、加齢とともに活動できる範囲も狭められ、生きる喜びや価値を見出すことも限られてくる。しかし、いきがいがなくては生きていく意欲を持つこともできない。

2009年に実施された「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（内閣府 http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_sougou/gaiyou.html）において生きがいの有無について調査したところ、「十分に感じている」と「感じている」とで8割近くの高齢者が生きがいを感じ、2003年度の調査時より上昇する傾向となった。

また、生きがいを感じる時との調査項目においては、「趣味やスポーツに熱中している時」、「孫や家族との団らんの時」、「友人や知人と食事、雑談している時」が上位項目となっている。ただし、属性別においては80歳以上や単身世帯、家族との接触が少ないほど、生きがいを感じる傾向は特に低下となっていた。

この調査結果からみると、高齢者にとってのいきがいは家族、友人、仕事、趣味などと密接に結びつき、生活の質（QOL）の向上が不可欠であり、生きがいが低下することで日常の生活動作（ADL）にも影響していくと考えられる。

では、限界集落である間崎島に暮らす高齢者の「いきがい」になることはどのようなこと

5) このデータは志摩市介護保険課長の個別面接のデータによる

なのか、また「いきがい」が持っているのかを2009年、1年間に4回、島を訪問、出会う人
に実施した聞き取り調査の報告を基に考察する。

K・Iさん（1932年生，女性）

間崎で生まれて、間崎で育った。小学校は間崎島小学校。みんなそうだが、中学校は和具
中学校に船で通った。

27歳のとき、左官屋をしていたこの島の男性と結婚。1男1女に恵まれ、4人の孫と2人
のひ孫もいるが、子どもは二人とも島を出て、めったに帰ってこない。夫婦二人だけの生活
がずっと続いている。

1週間に一度、和具に買い物に行くことが何よりの楽しみ。船賃は240円。賢島へ行くと
360円かかるし、賢島からまだ電車に乗って鵜方までいかないと買い物もできないので、車
のないKさん達は和具へ買い物に行くことが多い。

心配は急病のとき。消防団の人が船で賢島まで送ってくれることになっているが、しかし、
海が荒れると船を出せないこともあるし、船に乗るまでもたくさんの人の手で港まで運んで
もらわなければならない。

この島で暮らしているのだから、これでいいのだと思う。まあ、今は元気で、それだけで
もありがたいことだと思うと、Kさんは笑った。80歳だけれど、介護も医療も今は全く必要
がないのだ。

こうした話の中に、興味深い暮らしの話が出てきた。「煮方かご」という生活道具だ。大
きな魚をたくさん一度に煮る道具なのだそう。見せてもらったものは30年ほども使ってい
るもので、1本の竹が黒く焦げて折れていた。それほど長く使い込んだ道具なのだ。

竹かごの底の部分を想像してもらえばいいのだろう。大きな鍋の底に敷いて、大きな魚を
姿を壊さないように一度に炊く道具なのだ。江戸時代から使われていたようで、浜で取れた
魚を何軒かで集まって一緒に炊くグループができ、それを〇〇方、△△方と呼んでいたらし
い。そのグループを煮方と呼んだのだろう。今では煮方は無くなったけれど、かごにその名
前が残されている。

このかごを落としブタのように鍋の上に置く。魚は腹を上にならべて煮、出来上がりをひっ
くり返して皿に盛ると、おなが下が下になって、崩れずに並べられるというわけである。

なお、魚は右手に頭が来るように並べるのが正しいとか。

漁村ならではの魚の調理をKさんに習った。

K・Iさん（1935年生まれ，男性）

奥さんのSさんと二人暮らし。2008年8月、Sさんがくも膜下出血で倒れた時は大変だっ
た。動かしてはいけないというので、賢島まで船で救急隊員を迎えに行き、それから運んで
もらった。本土で普通に暮らしている人より30分は手当てが遅れたので、一時はあきらめも

した。3か月くらい入院したかなあ。今は手足のしびれや歩けないなどの後遺症は残っているけれど、元気になっているので、日常生活は電動車いすを使って普通にできている。

民宿でお客さんに出せる料理は作れないから辞めたけれど、年も年だから、それでよかったと思っている。夫婦二人の生活はちゃんとできる。温泉にも連れて行けば、女湯に一人で入ることができる。

KさんのSさんに対する態度は限りなく優しい。後遺症だけでなく、SさんもすっかりKさんに甘えきって、幼子のように優しい表情になっている。

この島でこうした救急の場合は本当に大変だ。島の消防団が救急船を用意しているけれど、Kさんの家のように海岸に暮らしている人はともかく、多くの人が丘の上に暮らしているので、海岸まで下ろすだけでも大変なことになる。多くが一人暮らしなので、家で倒れていてもわからないこともある。見つかっても、運んでくれる人がみんな高齢だから、お互いをお願いしあっているけれど、海に出ている人もいるし……。

そんな苦労を超えて、仕事もSさんの負担になる民宿はやめて、海苔の養殖だけにしたので、冬はそれなりに忙しいけれど、夏はのどかに、2日に一度くらい、合歓の郷の温泉に行ったり、勝浦まで行ったり、ほんとうにのどかに暮らしている、とKさん。私たちが訪問した時も、「メバルが籠に入ったので、明日の朝ご飯を食べにおいで」と誘ってくれた。煮つけだ。こんなにうまいものはないと、メバルの煮つけが自慢なのだ。実際に行ってみると、4人なのに1升もご飯を炊いて待っていてくださった。ビールやお酒もどんどん栓を抜いて、朝から大変な宴会になってしまった。

Kさんは和具の生まれ。兄、弟、妹の4人兄弟で。紹介してくれる人があって、24歳で間崎のI家の養子に。島生まれのSさんと結ばれた。男の子が二人生まれた。二人とも島を出て行った。ここでは暮らす当てがないから仕方がないと、出て行った子どもたちに理解を示す。

結婚した当時、Kさんは県立水産高校の実習船三重丸に乗っていた。Kさんが下船をしたすぐ後にこの船はフィジー沖で遭難。死人は出なかったけれど、三重丸は廃船に。間崎での暮らしを決心して、叔父さんの会社で真珠養殖に携わった。すぐに山口県の長門市へ行った。技術も何もなかったので、英虞湾内で技術のある人を募って、地元の人を雇用して、10人ほどの会社だった。結局、11年間も長門にいて、若狭湾以西の西日本中を回った。社長は伯父だったので、雇用された形だった。給料は15万円。でも夫婦で働いていたので、子どもを育てるのに苦労はなかった。当時、真珠もよかったし、大敷網も魚がよく取れて、それだけでも年間2000万円の収入があった。けれど、自分が社長になってやったら、15年で1500万円の借金が残った。いい玉が出ていたけれど、借金だけが増えていった。

これ以上やっても駄目だと思ったので、養殖の基地を2000万円で売った。英虞湾内では真珠を作りすぎていた。これではいけないと思って、ほかの仕事をした。以後は真珠の景気が悪くなって、この島の景気もずいぶん悪くなった。湾内でも5～6人の自殺者が出ている。

当時、弟が測量士をやっていた。そっちがいいと思ったので、資格を取って測量を10年やった。電力会社の仕事の下請けで、滋賀県の土山－永源寺間の測量をした。山の中をはいずりまわる仕事で、若いからできたが、もう絶対にできない。それほど厳しかった。

今は海苔の養殖をしている。海苔は冬の仕事なので辛いこともあるけれど、今の時期はのどかだ。息子にも海苔だったらできるかなと思っているが、若い妻が駄目だから、勧めない。忙しいときは朝の3時から日暮れまで働く。そんなことができる若い嫁はいない。この島にも結局結婚できなかった独身男性が数人いる。息子や嫁にはそんなことを強制はできない。

これからのことはわからない。私たちも10年も持たないだろう。しかし、どうしようもないから、成り行きに任せないと。どちらかが残ったら、息子が面倒を見てくれるだろう。それくらいには親孝行に育てたつもりだ。

K・Iさん（1929年生、男性）

間崎島の住民の大半は志摩の西側に固まって暮らしている。東側は畑と真珠の工場がぼつぼつとあるだけ。その東側の北に面した海岸に、K・Iさんの民宿は建っている。間崎島の住民というより、対岸の賢島の人と言った方がふさわしいかもしれない。西端にある間崎港に行くより、自分の船で賢島に行ったほうがきっと早いに違いない。

島の中央を走る、橋が架かったら役に立つはずの車の走る道からは、民宿はどこにあるかさえわからない。そんな民宿を40年もやっている。

突然の訪問にも関わらず、不法侵入の私を笑顔で応接間に入れてくれて、「日本茶がよろしい？コーヒーにします？」と、さすが40年の客商売とうならせる一言から会話が始まった。部屋もきれいし、何より清潔感漂っている。

Kさんの見た目も、私よりずっと若く見える。これで80歳とはとても信じられない。「若さの秘訣？ずっと体動かしてるからかな」と。2年前に奥さんをなくしてから、息子のNさんと二人で民宿を経営してるというのだ。「忙しいときは、結婚して名古屋に暮らしている二人の娘も手伝いに来てくれるけどな」長女60歳、次女56歳で、もう子どもたちも成人していて、自由になるらしい。

誰もが「おかあちゃん」と慕っていた民宿の看板おばちゃんが亡くなっても、賢島をはじめ、志摩地方の観光業が下火になっても、Kさんの民宿は健在なのである。

そのコツは？と聞いてみる。「民宿と言っても、兼業ではあかん。うちはずっと専業。お客の身になって、銭を出す人の身になってサービスをする」それが、まず清潔な部屋のたたずまいなのだ。「素朴でええと思う。余計なことを考えず、地のものをおいしく食べてもらう。それだけや」

話をしながら、厨房で何かを茹でていたのだろう。息子さんに「火を止めろ」と指示を出す。カニを売りに対岸の立神の高齢の漁師がやってくる。いつものことなのだろう。漁師の言うままにお金を払い、カニは民宿の前の生簀に放つ。

「工夫も必要や。このワタリガニは山陰のマツバガニより絶対にうまい。けれど、足が細いから食べにくい。かといって、食べやすいように、切って出したら、お客は喜ばん。姿のまま出して、目の前で、食べやすいように包丁を入れてあげる。これがサービスや」

「間崎港よりも賢島港に向いているのもそう。勝手に来て、というて、間崎港から歩いてきてもらおうと、そら大変や。賢島の駅に着いたときに電話もろたら、何をおいてもすぐに船を出す。そしたら、駅から港に歩いているときに、私の船が迎えに来るのが見える。これが島の民宿の魅力や」

話を聞いているだけでも面白い。素人の私でも、コツを聞くと民宿ができそうな気がしてくる。

そんなKさん、名前の通りこの島で生まれ、和具の中学校に通い、戦争が終わる前の43年、SLの運転がしたくて国鉄入社。「大人たちは戦争に行っていたから、若造でもすぐに運転手になれた。戦争中だから、自分では海軍に志願しようとも思ったけれど、島の年寄りが国鉄へ行けと言った」

この島の人なら真珠で行こうとは思わなかったんですか。誰でも思う疑問だろう。離島の住民がSLでもないだろうと私は思った。「真珠は進駐軍が来てから景気がよくなったんや。アメリカの兵隊が本国における奥さんに土産に買うたから」

そうなのだ。この島の真珠ブームは戦後のことなのだ。

こうしてKさんはSLの運転手になった。鳥羽－亀山間や松阪－伊勢奥津間の運転をしていたという。1970年ごろ、まだ、近鉄特急が賢島まで走っていなかった頃、私たちも近鉄「伊勢市」駅で降りて、鳥羽までJRに乗って、鳥羽からまた志摩電と呼ばれていた1両の電車に乗って賢島へ行った。

好きなSLの運転手を辞めたのは、1950年、国鉄の大量首切りがあったとき、自分はその対象になっていなかったけれど、辞めなければならない友人の代わりに国鉄を辞めた。

「真珠が景気よくなっていたから何やけど、美談として新聞にも載った」と。

そのちょっと前、中学校の同級生と恋愛結婚。20歳だった。国鉄の寮は伊勢で、同級生の彼女は鳥羽の神鋼電機で働いていた。戦争中やから、手もつなげんかった。「あの人が好きや」というたら、年寄りが仲を取り持ってくれた。

25歳からずっと間崎で。子どもたちも間崎で生まれ、間崎で育てた。3人ともちゃんと育ててくれた。

間崎の最盛期は1955年頃。今はすっかり空き家だらけの島になった。医師のいないことへの不安は島民全体の不安だとKさんは言う。真珠作りはもうだめだろう。アメリカの景気もそう簡単によくならないし。結局、孫は東京の大学へ。「若い人はここではかわいそうや。将来の見込みがない。20年後のこの島の寂しさは想像もできない」と。しかし、介護がないことに不安はないと言い切る、ずっとこうだったんだからと。医療のない不安と介護のない不安は私には同じに見えたけれど、Kさんはそうではないらしい。

「賢島に行くことが当然や。車も賢島に置いている」と、Kさんは観光業者としては当然の感想を持っているが、その賢島も人がいないと指摘すると、Kさんの目が遠くを見つめるようになった。

「まあ、わしはここで死ぬけどな。息子には息子の暮らし方があるやろう」
先の見えないのはこの島に住む人に共通のことだった。

K・Y (1935年生, 女性)

間崎島で生まれ、育った。21歳で結婚。ご主人と二人で真珠養殖を始めた。毎年4月、6月、7月に核入れをし、12月に引き上げ、採集する。9月にも核入れをすることがあるが、それは「越し物」と呼ばれる。

こんな風にYさんは真珠養殖の様子を次々に語ってくれた。ずっとご夫婦で真珠養殖一筋という感じなのだ。和具には海女さんがたくさんいるけれど、この島にはいないということも不思議な感じがした。どちらがしんどい仕事なのか知らないが、これが文化というものなのだろう。距離や位置、あるいは海流や海の深さ、海底の様子などにもよるのだろうが、ほんの少しの違いで、養殖をする人、海に潜る人、それぞれの仕事に誇りを持って取り組んでいる。

これまでにこの島で暮らして思い出に残っていることは、伊勢湾台風のこと。2歳の子どもを連れて隣の家の蔵に避難させてもらって助かったけれど、海岸にあった家は全壊。海に流されてしまったようだ。

また、30年くらい前に、近くの島にキャンプに来ていた医学生が海に溺れ、海流の関係でこちらに流されてきたのを「わしら」で助けたこともあった。しかし、手紙1本くれなかったことを今でもさびしく思い出すとか。

Kさんは自分のことを「わし」という。男の人も同じ言葉で自分を言う。結婚してからずっと一緒に働き、一緒に家事を分担して、Kさんの雰囲気では、男と女が同等にあるように思えた。そういえば、この地方の海女には、「舟人海女」と呼ばれる海女がいて、夫婦で船に乗り、妻が潜り、夫は船の上で命綱を預かるというのがあると聞いたことがある。命綱は預かるけれど、夫は直接収穫をしないのだ。二人で一緒にないと、家族としての収入にならないのである。対等にならざるを得ない。一方、一人で海に潜る海女は「徒人（かちど）海女」と呼ばれている。命綱がない分だけ、収穫量も違うそうである。

また、Kさんは30年前に一度風邪を引いただけで、病気をしたことがないという。娘が結婚して松阪に住んでいるのだが、月に一度、彼女が迎えに来てくれて、歯科に通院しているが、これが唯一の楽しみだという。病院への通院が楽しみというのもおかしな話だが、深刻な命にかかわる病気や不快な状態になる病気をしたことがないというのも、すごい話である。もうすぐ後期高齢者になるというほど生きてきたのに。病院がないのもうなずけると、変なところで感心してしまった。

家に鍵をかけたことがないというのも、都会人には信じられない話だ。昔の田舎はどこもそうだったのだろうが、人が入れ替わり立ち替わりしているうちに、鍵は必要なものになった。この島では未だに安心が出来る関係を持つ地域が残されている。

現在、51歳の息子が家業の真珠養殖を継いでくれて、一安心だが、女の人がこの島にはいないので、結婚が難しく、それが一番の心配ごとだが、どうしようもないと、あきらめざるを得ない。畑も少しあるので、野菜の自給が可能だから、暮らしに困ることはない。1年中体を動かしているKさんはまだまだ元気だ。

間崎島の高齢者の生きがいについての考察

間崎島における聞き取り調査は20数名の方から聞くことができた。その中で、今回は4人の報告を掲載したが、どの方も健康である限りはこの島で暮らしたいという気持ちをもっていった。しかし、島の毎日に特別な何かがあるわけではない。災害や病気に対する不安もいっばいである。しかし、淡々と毎日を過ごしているのである。

そのことを踏まえて考えると、間崎島で暮らす高齢者にとってのいきがいは「これまでの思い出をもとに変化なく暮らすこと」であるかもしれない。聞き取り調査の報告においても、体調の変化などによる救急搬送や火災、災害時の対応における不安は共通した問題意識となっているが、対応策は見つからないのが現状である。介護の不安も大きいですが、介護が必要になったり、夫婦どちらかが死亡し一人になったら、島外の子どものところに行くことが当然だと思っているのである。

間崎島に暮らす高齢者は、これまでの家族や真珠でにぎわっていた当時の思い出を大切にしながら暮らしてはいるが、特に島への愛着が強いようにも思われなかった。多くの人が若い頃は島の外で真珠養殖などに従事していたし、子どもが島の外に出ていくことを当然のように容認しているのだ。

しかし、若者がいなくなり、住民の高齢化が進み、生活の基盤が崩壊している限界集落に住み続けなくてはならない現状を、この間崎島からは垣間見ることができた。これから各地に見られる限界集落の消滅期における高齢者は、いきがいを過去に求めながら、静かにその時を待っているだけなのかもしれない。

間崎島高齢者の介護など日常生活ニーズに関する調査

この調査は、2010年5月20日から6月16日の約1か月間にわたって、志摩市健康福祉部介護保険課長の原口吉弘さんが、市の介護保険計画作成のために、毎日島に渡って、1軒1軒訪問し、個別にインタビューして聞き取った話しをもとに対象者の概要（1～7）に考察を加えたものである。次の、1. 生活状況 10. 離島で不便なことや困っていることの項目についてはデータをもとに分析し考察を加えた。

間崎島高齢者日常生活圏ニーズ調査

1. 調査目的

離島の介護のあり方について調査・検討する。

2. 調査対象及び方法

三重県志摩市間崎島に居住する91名の島民の自宅を訪問し、協力の得られた83名に対して作成した調査票（アンケート用紙）を基に聞き取り調査を行った。（有効回答率：91.2%）。

3. 調査期間

2010年5月20日から6月16日で調査を実施した。

4. 調査内容

1. 生活状況

- 1) 現在の暮らし
- 2) 仕事
- 3) 住居

2. 運動・閉じこもりについて

- 1) 階段の昇降
- 2) 椅子からの立ち上がり
- 3) 連続歩行
- 4) 外出

3. 転倒予防について

- 1) 転倒経験
- 2) 転倒に対する不安
- 3) 円背・亀背
- 4) 歩行速度
- 5) 杖の使用

4. 口腔・栄養について

- 1) 体重の減少
- 2) 口腔機能
- 3) 口渇

5. 物忘れについて

6. 日常生活について

- 1) 外出を伴う身の回りのこと
- 2) 家庭内での身の回りのこと

7. 社会参加について

- 1) 書類の記載
- 2) 新聞の購読
- 3) 読書
- 4) 健康についての記事や番組への関心
- 5) 友人宅の訪問
- 6) 相談
- 7) 病人の見舞い
- 8) コミュニケーション
- 9) ボランティア活動
- 10) 地域活動

8. 健康について

- 1) 健康状態
- 2) 薬の種類
- 3) かかりつけ医の有無
- 4) 通院状況
- 5) 精神状況

9. 介護保険について

- 1) 介護保険制度の認知状況
- 2) 介護保険サービスの利用意向

10. 離島で不便なことや困っていること

対象者の概要

1. 性別

総 数	男性	女性	無回答
83人	36	47	0
100%	43.4%	56.6%	0%

2. 家族構成

総 数	ひとり暮らし	家族と同居	無回答
83人	16	67	0
100%	19.3%	80.7%	0%

平均家族数：2.0人

3. 同居している方

総 数	配偶者	息子	娘	子供の 配偶者	孫	兄弟姉妹	その他
83人	59	12	1	3	3	0	1
100%	71.1%	14.5%	1.2%	3.6%	3.6%	0%	1.2%

一人暮らし、高齢夫婦の高齢者世帯が圧倒的である。息子・娘は13人いるがその配偶者が3人しかいないのは、結婚していない息子・娘（あるいは離婚している）が10人いることを示し、離島の第1次産業従事者が結婚できない状況を示している。このことも限界集落化に拍車をかけている。

4. 介護・介助の必要性

総 数	はい	いいえ	無回答
83人	8	75	0
100%	9.6%	90.4%	0%

介護の必要な人は8人であり、この島では重度の介護が必要になると暮らしていくことがむずかしいことが推察される。

5. 介護・介助している方

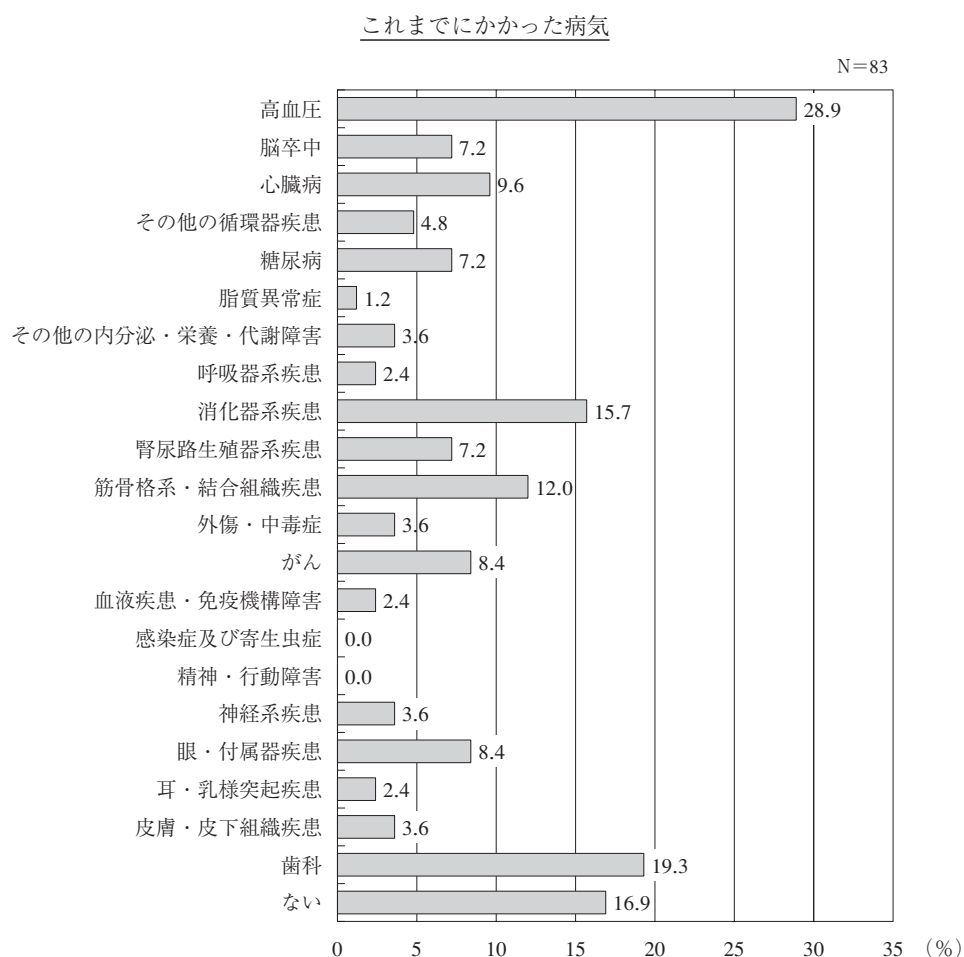
総 数	配偶者	息子	娘	子供の 配偶者	孫	兄弟姉妹	その他	無回答
8人	5	1	1	0	0	0	0	1
100%	62.5%	12.5%	12.5%	0%	0%	0%	0%	12.5%

6. 年金の種類

総数	国民年金	厚生年金	共済年金	その他
83人	77	24	2	0
100%	92.8%	28.9%	2.4%	1.4

多くの人の職業が自営であったため、国民年金を受給している。厚生年金や共済年金（国民年金とのダブル受給者もいる）受給者と国民年金だけの受給者では格差が大きい。

7. これまでにかかった病気

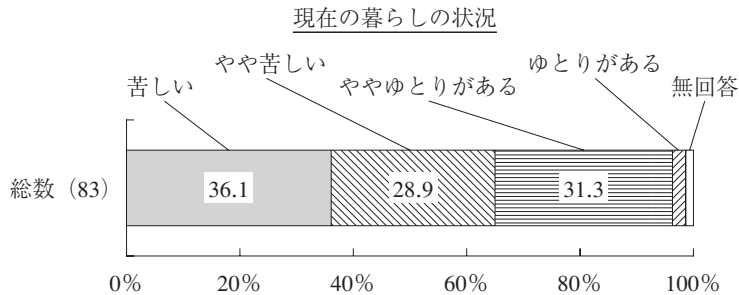


食事のせいかな、高血圧症の人が多し。精神神経疾患にかかった人が一人もいないのは島の特徴だろう。もしかしたら、かかっていると言えないのかもしれないが。

調査の結果

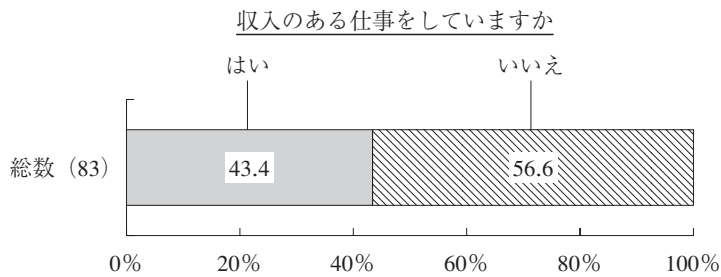
1. 生活状況

1) 現在の暮らし



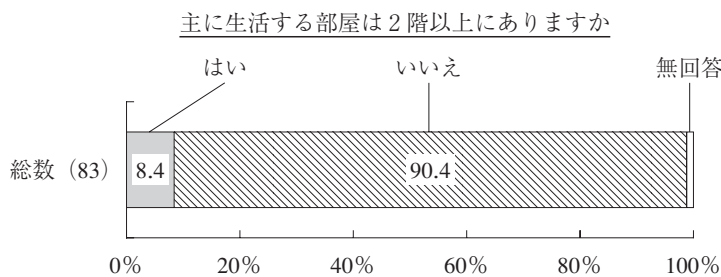
現在の暮らしの状況を見ると、「苦しい」と回答した方が36.1%、「やや苦しい」と回答した方が28.9%であり、大半の方が生活に苦しさを感じながら暮らしているとみられる。

2) 仕事



仕事についてみると、現在、収入のある仕事をしている方は43.4%で半数を下回っている。半数以上の方が収入のある仕事をしておらず、それが前述の生活に苦しさを感じながら暮らしている方が多いことにつながっていると推察される。

3) 住居

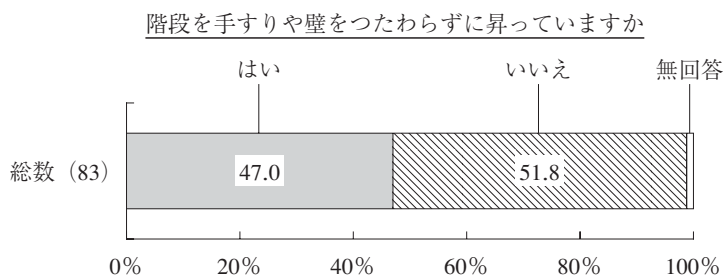


住居についてみると、当該調査の回答者全員が一戸建ての持ち家に住んでおり、家にエレ

ベーターを設置している方は1名もみられなかった。また、主に生活する部屋が2階以上にある方は8.4%であり、ほとんどの方が主に生活する部屋を1階に設置しているとみられる。

2. 運動・閉じこもりについて

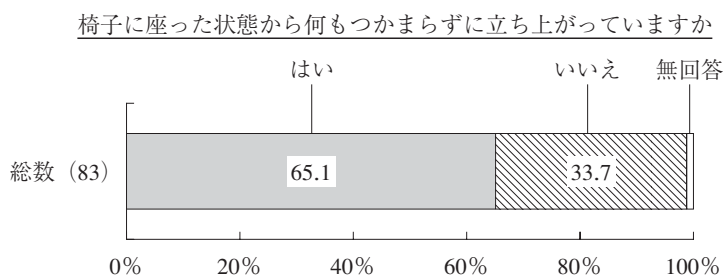
1) 階段の昇降



階段の昇降についてみると、階段を手すりや壁をつたわずに昇っている方が47.0%で半数に満たない。今回の調査で面談した方々では、高齢のせいもあり、階段の昇降に関して特に降りる時が辛いという声が多く聴かれた。

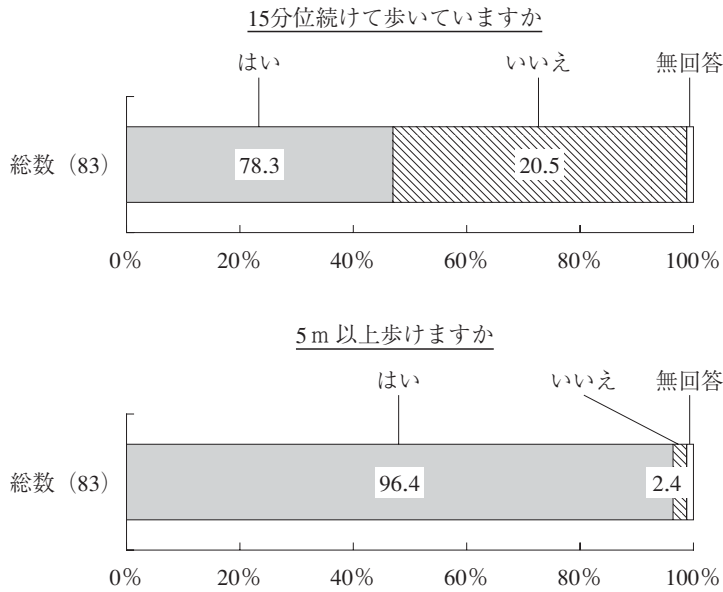
また、仕事をしていない方でも畑へ出かける人が多く、足が痛くても外へ出る方が多い。しかし、その一方で日中に外に出るのが嫌いで、ほとんど外に出ないという方もみられ、こういった方々は、今後、更に足腰が弱くなることが懸念される。

2) 椅子からの立ち上がり



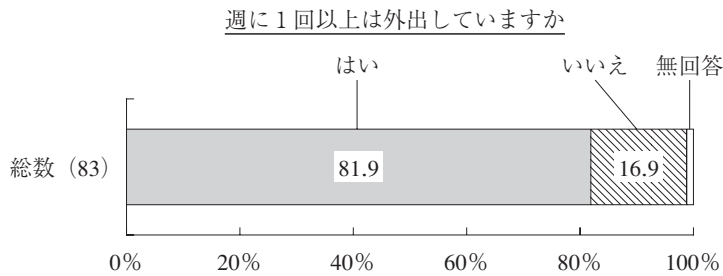
椅子からの立ち上がりについてみると、椅子に座った状態から何もつかまらずに立ち上がれる方は65.1%を占めている。

3) 連続歩行



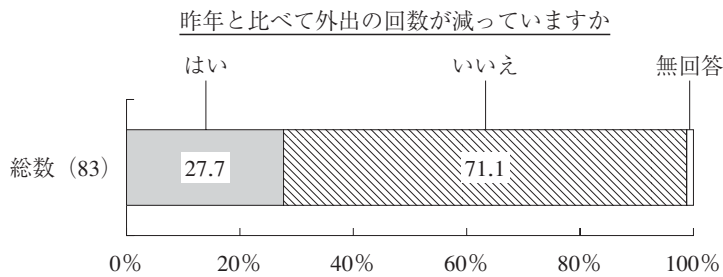
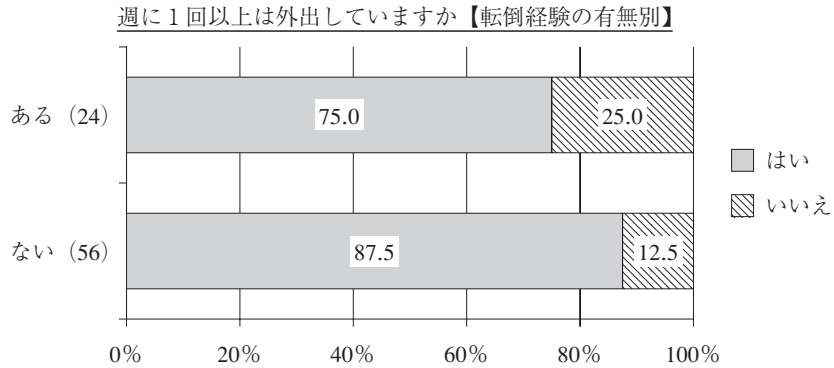
連続歩行についてみると、15分以上続けて歩いている方が78.3%、5m以上歩ける方は96.4%を占めている。

4) 外出

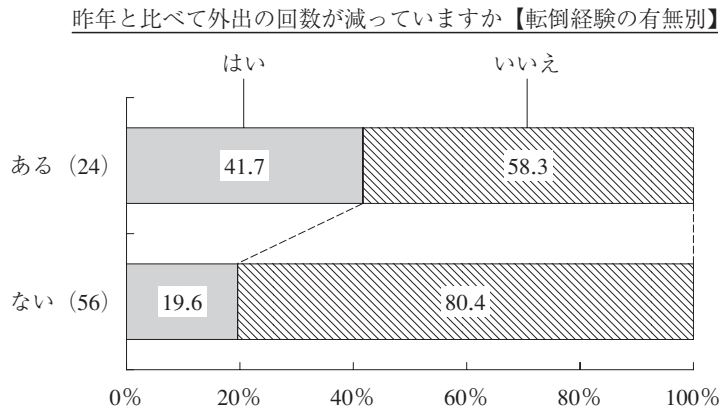


外出の状況についてみると、週に1回以上外出している方は81.9%を占めている。しかし、16.9%もの方が、週に一度の外出もしていない。

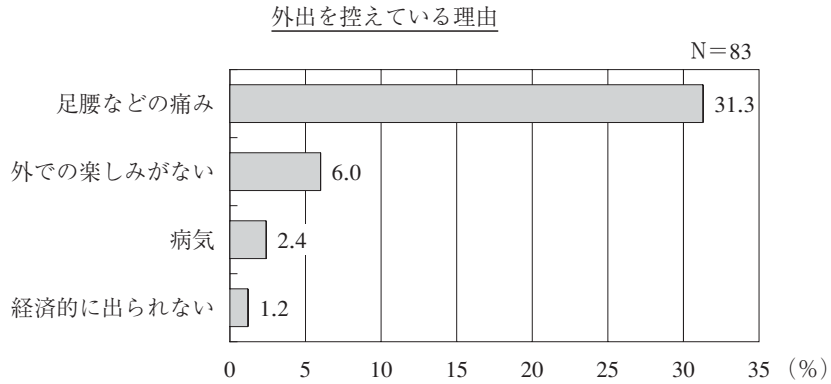
これを転倒経験の有無別にみると、週に1回以上外出している方の割合は、転倒経験のない方がある方を10%以上上回っている。ただ、転倒経験がある方でも75%が週に1回以上外出しており、転倒経験の有無が外出の状況に及ぼす影響は小さいとみられる。



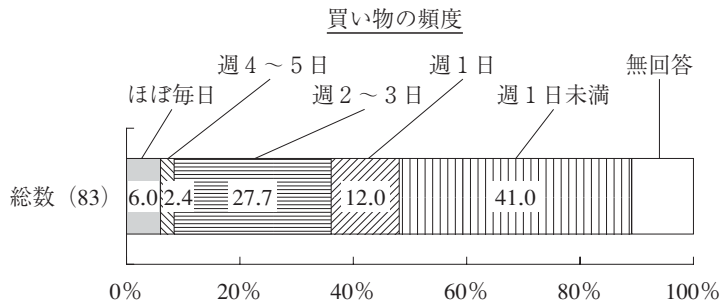
次に外出回数の減少についてみると、昨年と比べて外出の回数が減っている方は27.7%である。



これを転倒経験の有無別にみると、昨年と比べて外出の回数が減っている方の割合は、転倒経験のある方がない方を20%以上上回っており、転倒した経験が外出回数の低下につながっていると推察される。

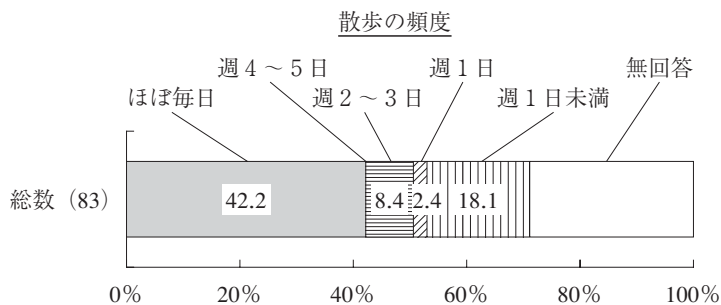


外出を控えている理由についてみると、「足腰などの痛み」が31.3%で突出して高く、これに「外での楽しみがない」(6.0%)、「病気」(2.4%)、「経済的に出られない」(1.2%)が続いている。



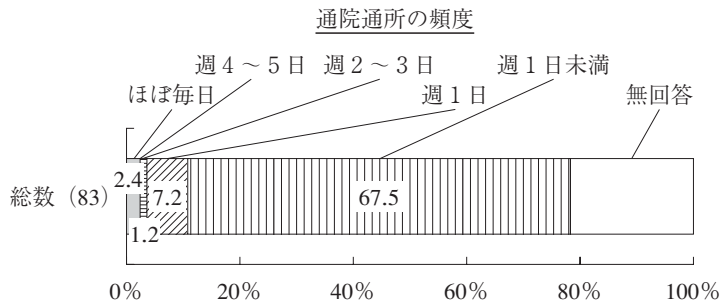
買い物の頻度をみると、週1日未満の方の割合が41.0%で最も高い。週1日の方が12.0%であり、半数以上の方が週1日以下の買い物にとどまっている。

買い物は、島内に商店が1軒あるものの、品揃えが少なく、ほとんどの方が鵜方や和具に出かけたときに必要なものを買っている。また、島外に住む子どもが買ってきてくれるという人や、隣の人に頼むという人もあり、島内の商店の少なさが、買い物の頻度の少なさに影響しているとみられる。

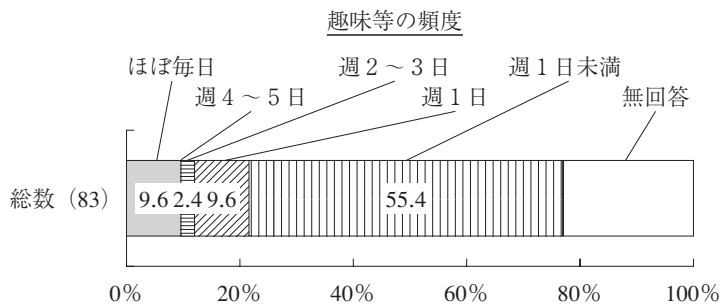


散歩の頻度をみると、ほぼ毎日の方の割合が42.2%で最も高い。週4~5日の方が0名、

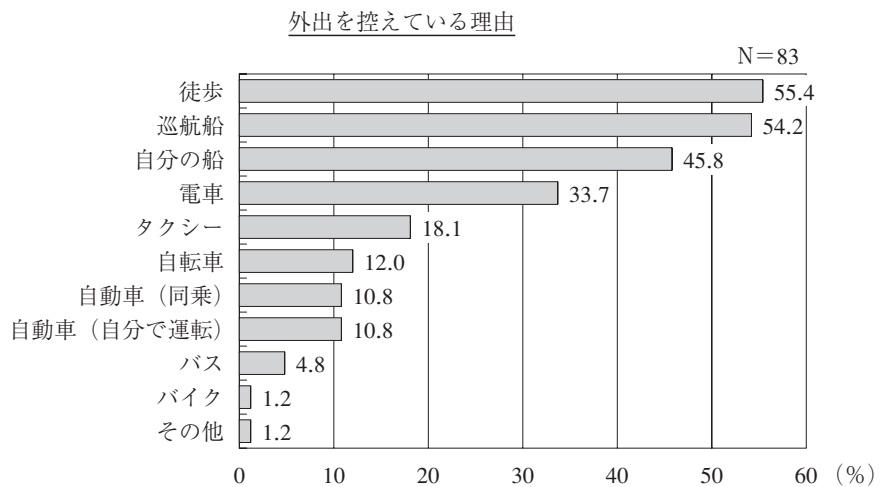
週2～3日の方が8.4%であり、半数以上の方が週2日以上散歩をしている状況が窺われる。



通院通所の頻度をみると、週1日未満の方の割合が67.5%で最も高い。現在月に一度、志摩市の中心部に位置する鷺方の開業医がボランティアで訪問診察を実施してくれており、これらの方々のほとんどが月1回程度この開業医へ薬をもらいに行く人とみられる。



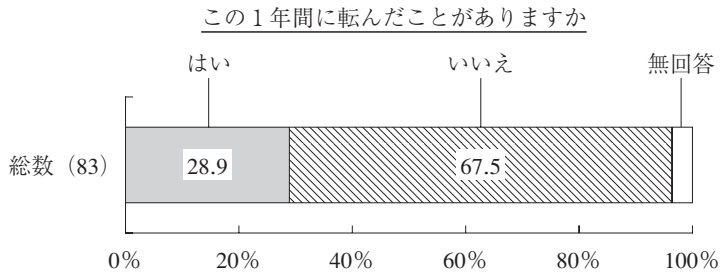
趣味等の頻度をみると、週1日未満の方の割合が55.4%で最も高い。趣味については、チーム遊びが週1回来て行うカローリングや島外でゴルフや囲碁を楽しむ人はごく僅かで、ほぼ毎日と回答している方の多くは「畑が趣味」と回答した人である。



外出する際の移動手段についてみると、「徒歩」「巡航船」の割合がともに55%前後で高く、「自分の船」が45.8%で続いており、船が主たる移動手段になっていることがわかる。

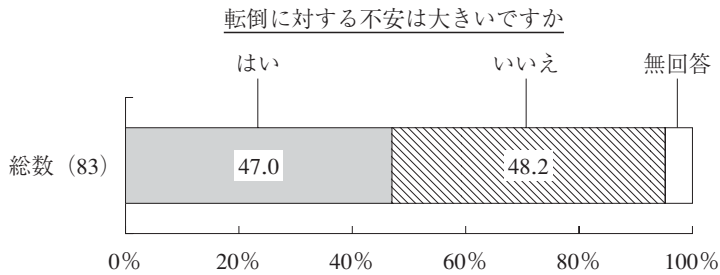
3. 転倒予防について

1) 転倒経験

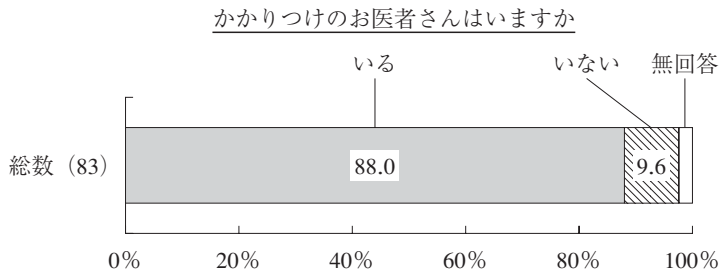


過去1年間における転倒経験についてみると、転倒経験がある方の割合は28.9%である。

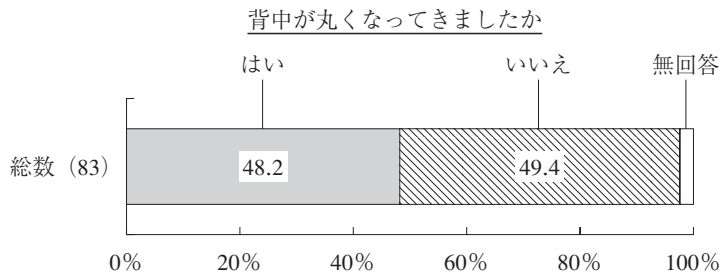
2) 転倒に対する不安



転倒に対する不安についてみると、ほぼ半数の方が転倒に不安を感じている。

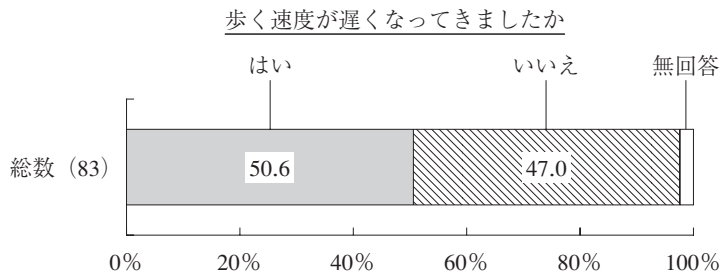


3) 円背・亀背



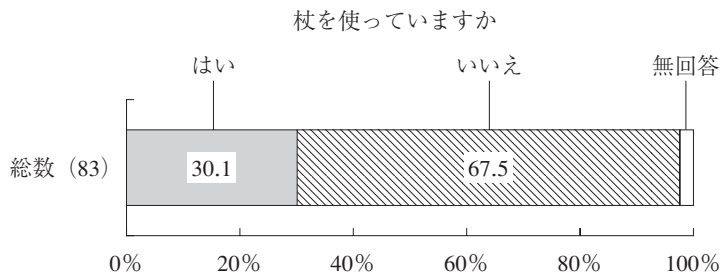
円背・亀背の状況についてみると、ほぼ半数の方が背中が丸くなってきたと感じている。

4) 歩行速度



歩行速度についてみると、半数以上の方が歩く速度が遅くなってきたと感じている。

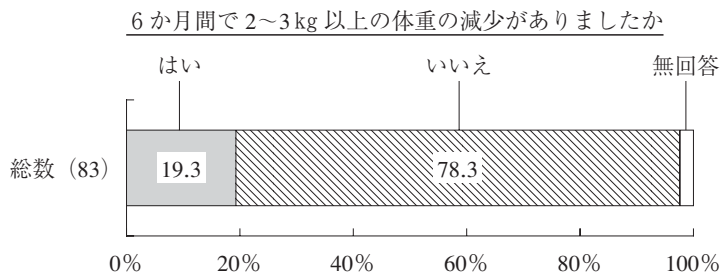
5) 杖の使用



杖の使用状況を見ると、約30%の方が杖を使用しており、足の痛みを訴える方が多くみられた。

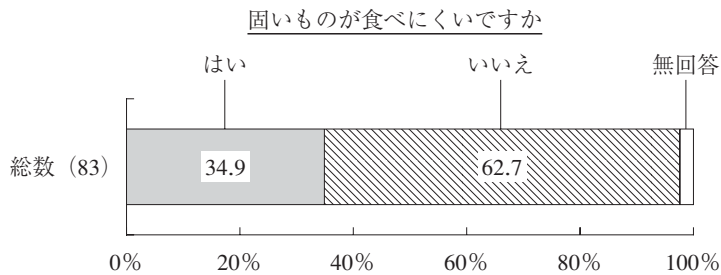
4. 口腔・栄養について

1) 体重の減少

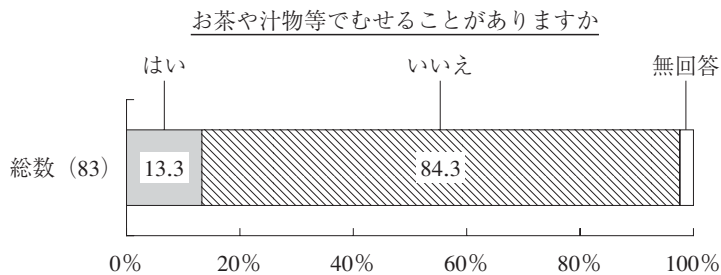


体重の減少についてみると、過去6か月間で2~3kg以上の体重の減少があった方はほぼ2割である。

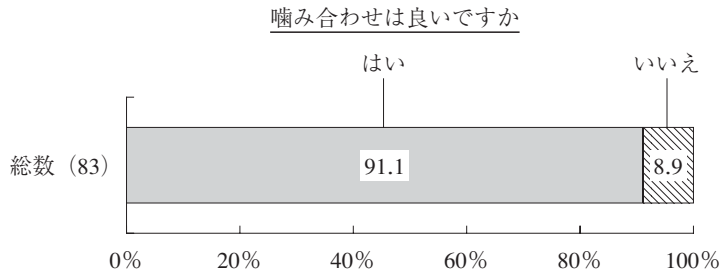
2) 口腔機能



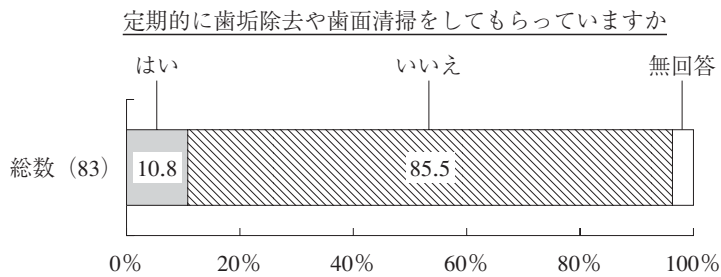
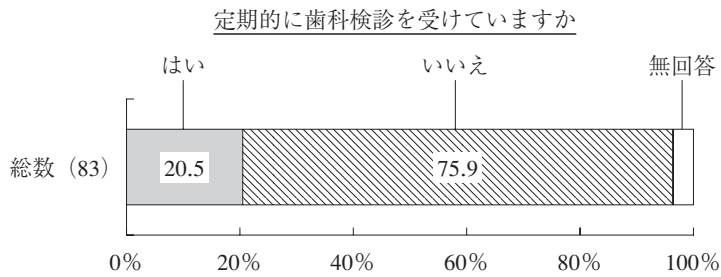
口腔機能についてみると、固いものが食べにくいと感じている方が34.9%である。



お茶や汁物等でむせることがある方は13.3%である。



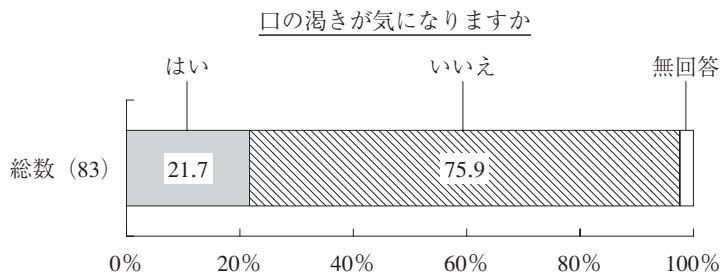
噛み合わせが良いと感じている方は91.1%を占めている。



一方、定期的に歯科検診を受けている方は20.5%、定期的に歯垢除去や歯面清掃をしてもらっている方は10.8%にすぎない。

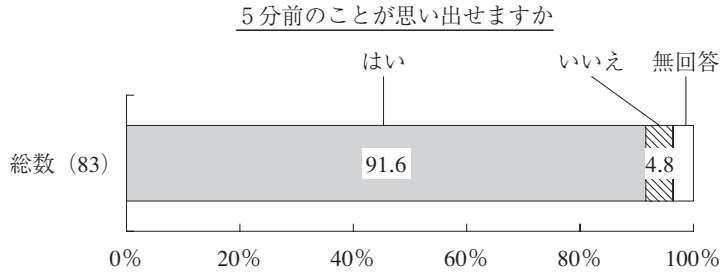
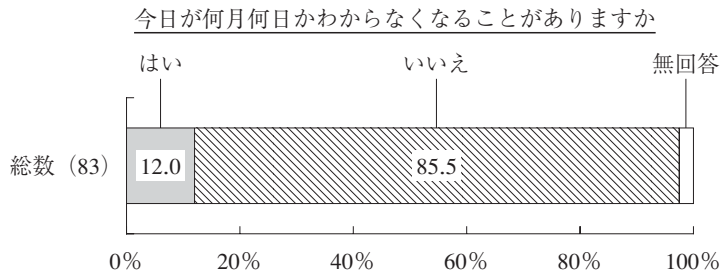
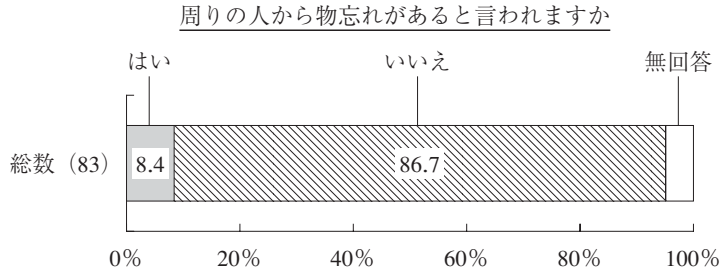
噛む機能や嚥下機能といった口腔機能が衰えている方は少ないものの、歯科検診の習慣がある方が少なく、これが総入れ歯の方の増加に影響しているとみられる。

3) 口渇

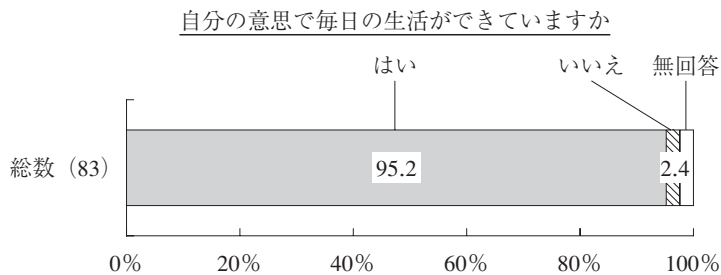


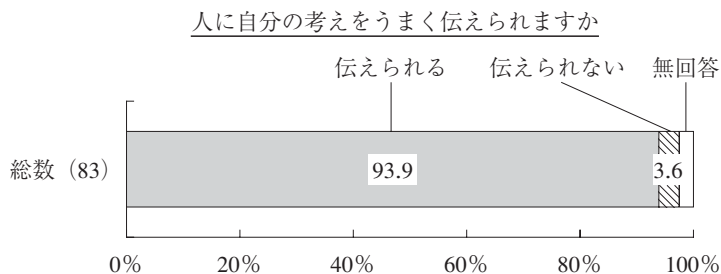
口渇についてみると、口の渇きが気になる方は21.7%である。

5. 物忘れについて



物忘れについてみると、周りの人から物忘れがあるとされている方は8.4%、今日が何月何日かわからなくなることがある方は12.0%である。一方、5分前のことを思い出せる方は91.6%を占めていた。





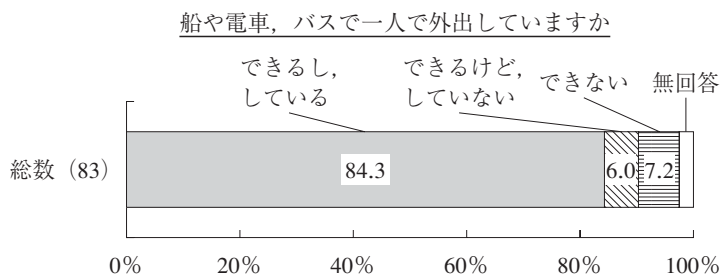
自分の意思で毎日の生活ができている方が95.2%，人に自分の考えをうまくつたえられている方が93.9%を占めている。

ほとんどの方が子供を頼らずに生活しているということもあり，生活に支障をきたしているような方はほとんど見られなかった。

6. 日常生活について

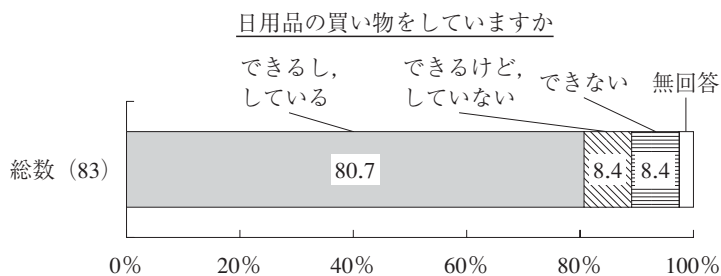
1) 外出を伴う身の回りのこと

① 単身での外出



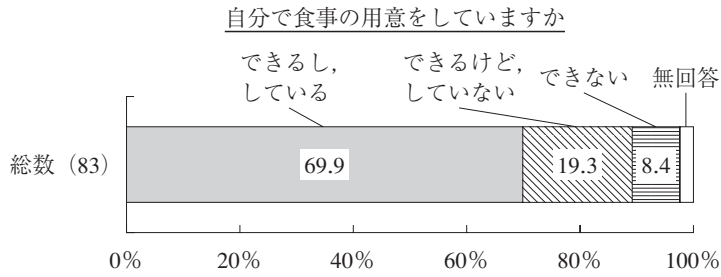
単身での外出についてみると，船や電車，バスを利用して一人で外出できるし，している方は84.3%を占めている。

② 日用品の買い物



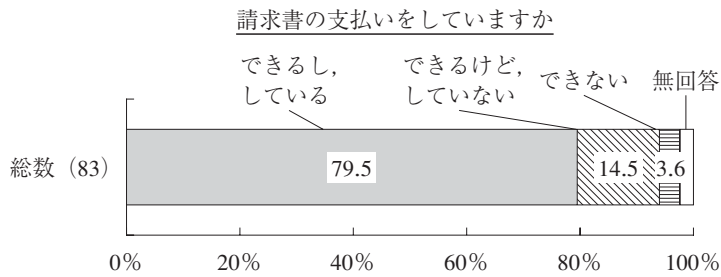
日用品の買い物についてみると，日用品の買い物をできるし，している方は80.7%を占めている。

③食事の用意



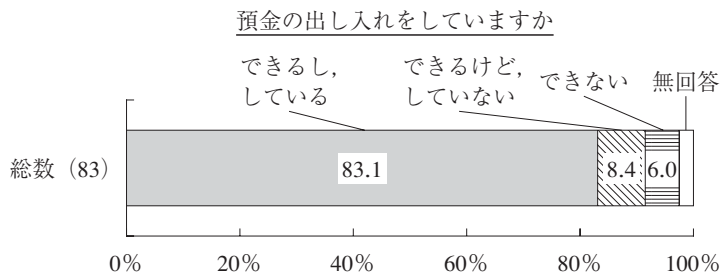
食事の用意についてみると、自分で食事の用意をできるし、している方は69.9%である。

④請求書の支払



請求書の支払についてみると、自分で請求書の支払をできるし、している方は79.5%である。

⑤預金の出し入れ



預金の出し入れについてみると、自分で預金の出し入れをできるし、している方は83.1%を占めている。

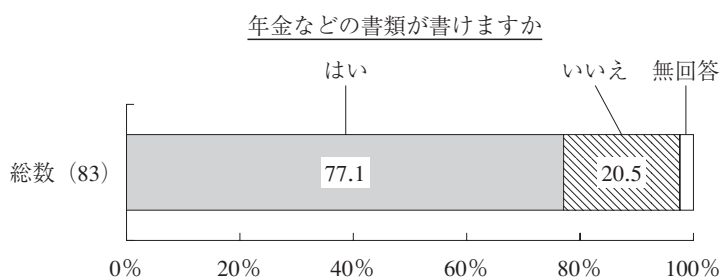
2) 家庭内での身の回りのこと

食事、寝床、座位の保持、洗面や歯磨き、トイレ、入浴、50m以上の歩行、階段の昇降、着替え、排泄については、いずれもほぼ全員の方が自力できると回答している。

日常生活についてはいずれの項目についても自力できている方が多く、現在のところ大半の方が自立して生活できているとみられる。しかし、足腰の機能低下がみられる人も多く、数年先には要介護者が増える可能性が高い。

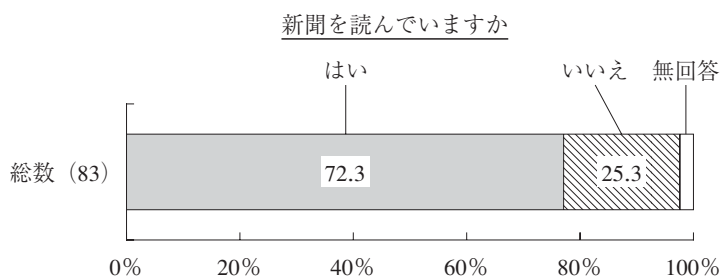
7. 社会参加について

1) 書類の記載



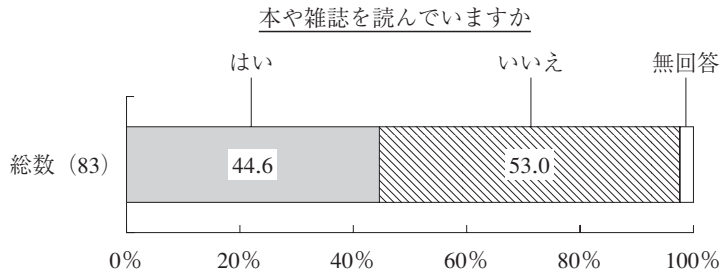
書類の記載についてみると、年金などの書類が書ける方は77.1%を占めている。

2) 新聞の購読

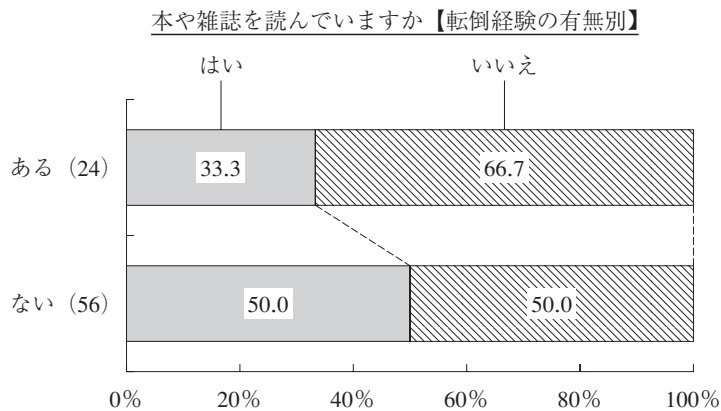


新聞の購読についてみると、新聞を読んでいる方は72.3%を占めている。なお、新聞は毎日一番の船で配送され、島民が販売店と契約し、各戸配達をしている。

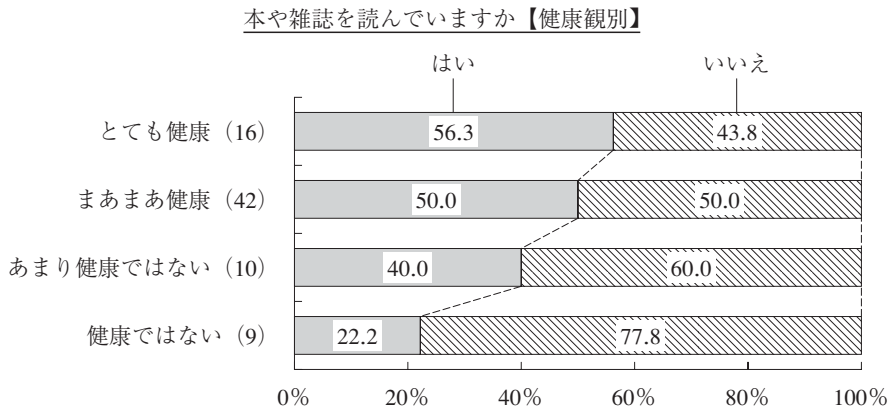
3) 読書



読書についてみると、本や雑誌を読んでいる方は44.6%で半数を下回っている。

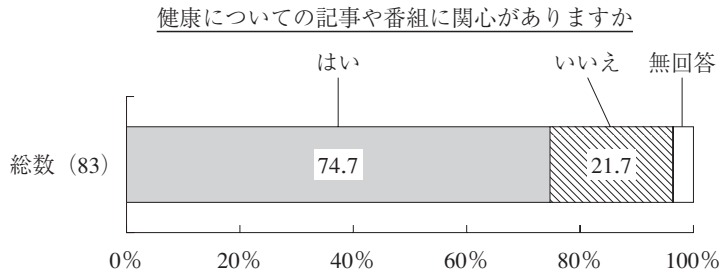


これを転倒経験の有無別にみると、本や雑誌を読んでいる方の割合は、転倒経験のない方がある方よりも20%近く上回っている。転倒した経験は、読書習慣の低下につながっているとみられる。



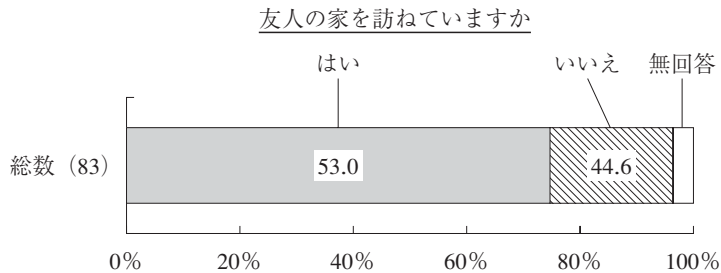
健康観と本や雑誌を読んでいる方の関係は、健康観が高い方ほど本や雑誌を読んでいる人の割合が高くなっている。健康感によって読書の状況に大きな差が生じていると推察される。

4) 健康についての記事や番組への関心

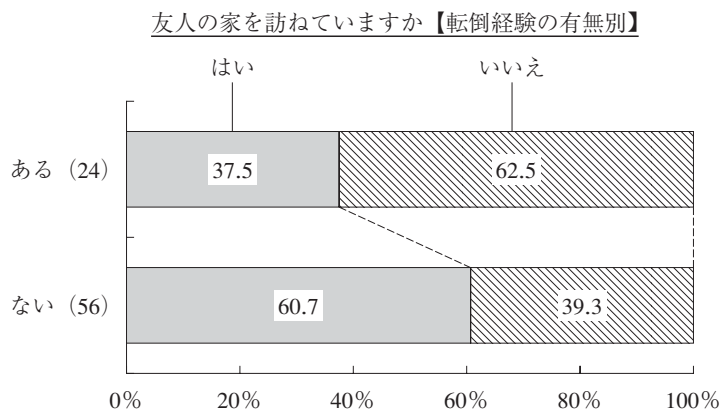


健康についての記事や番組への関心についてみると、健康についての記事や番組に関心があると答えた方は74.7%を占めている。

5) 友人宅の訪問

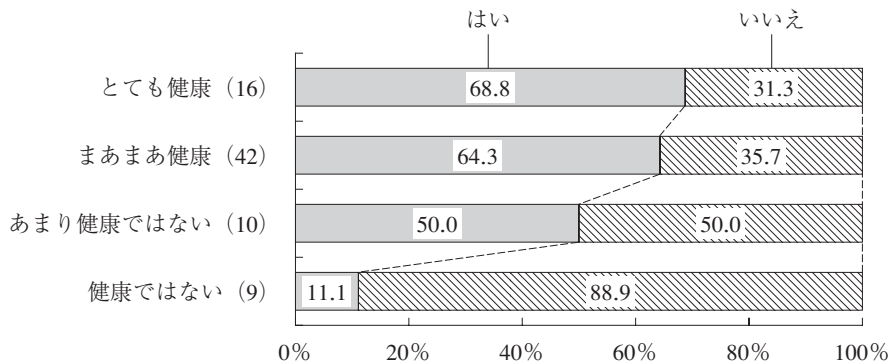


友人宅の訪問についてみると、友人の家を訪ねている方は53.0%である。



これを転倒経験の有無別にみると、友人の家を訪ねている方の割合は、転倒経験のない方がある方よりも20%以上上回っていることが分かった。

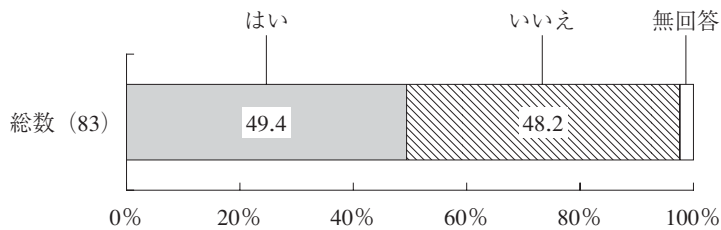
友人の家を訪ねていますか【健康観別】



健康観別にみると、友人の家を訪ねている方の割合は、健康観が高い方ほど高くなる傾向がみられる。

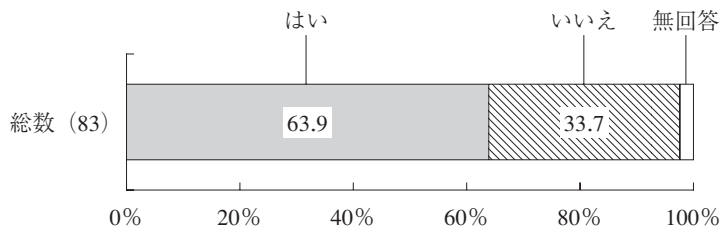
6) 相談

家族や友人の相談にのっていますか

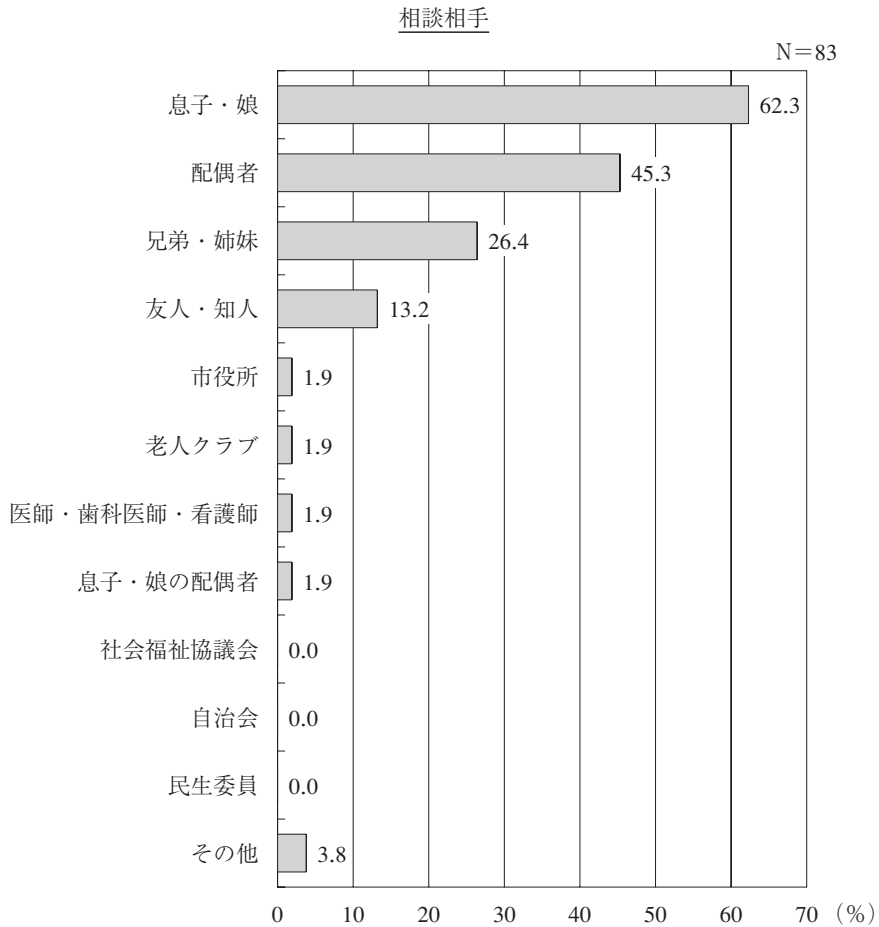


相談についてみると、家族や友人の相談にのっている方は49.4%でほぼ半数である。

家族や友人・知人等に相談をしていますか

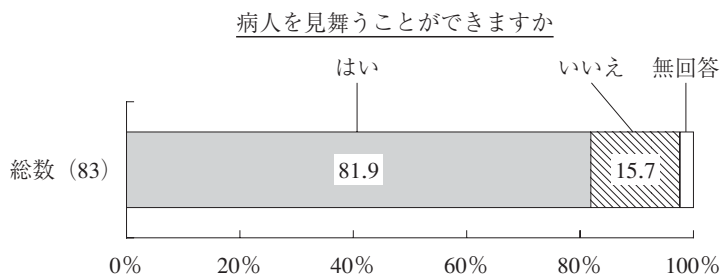


一方、家族や友人・知人等に相談をしている方は63.9%で、相談にのっている方を10%以上上回っている。



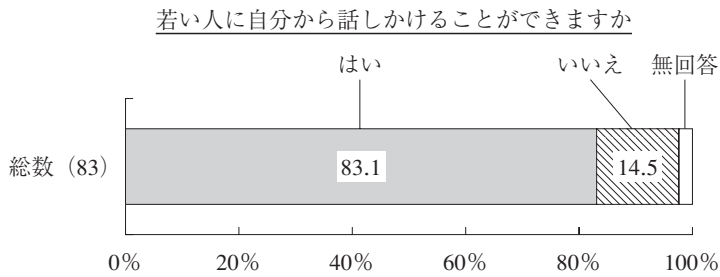
相談相手についてみると、「息子・娘」の割合が62.3%で最も高く、これに「配偶者」(45.3%)、「兄弟・姉妹」(26.4%)が続いている。「友人・知人」は13.2%にすぎず、身内が上位に来ており、地域連携が希薄な状況が窺われる。

7) 病人の見舞い



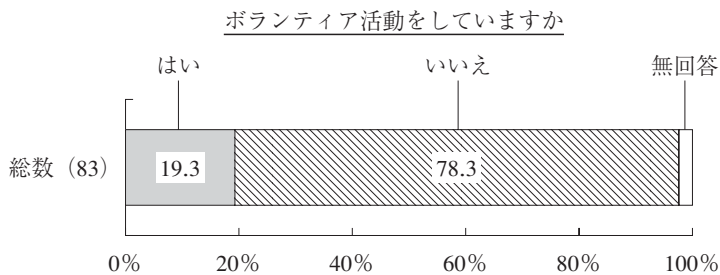
病人の見舞いについてみると、病人を見舞うことができる方は81.9%を占めている。

8) コミュニケーション

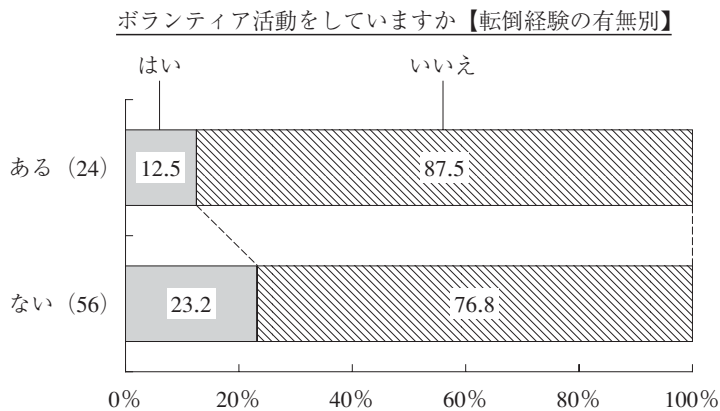


コミュニケーションについてみると、若い人に自分から話しかけることができる方は83.1%を占めている。

9) ボランティア活動

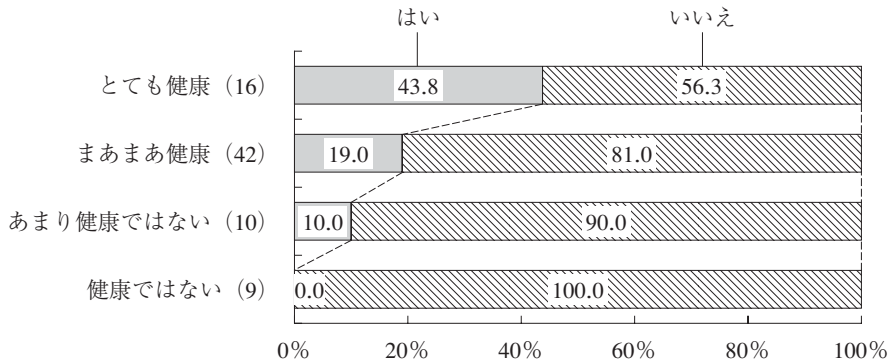


ボランティア活動についてみると、ボランティア活動をしている方は19.3%にとどまっている。



これを転倒経験の有無別にみると、ボランティア活動をしている方の割合は、転倒経験のない方がある方より10%以上多くなっていた。転倒経験の有無は、ボランティア活動の状況に少なからず影響を与えているとみられる。

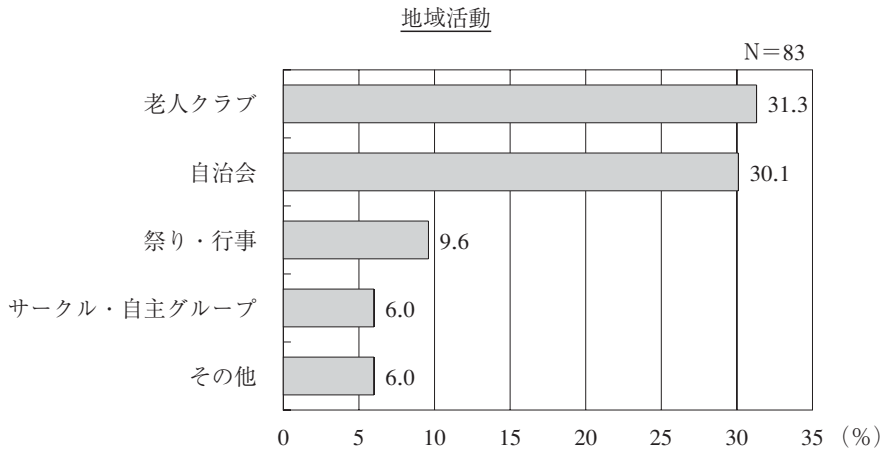
ボランティア活動をしていますか【健康観別】



これを健康観別にみると、ボランティア活動をしている方の割合は、健康観が高い方ほどボランティアをしている人の割合が高くなっており、「とても健康」の方では43.8%を占めている。健康観によってボランティア活動の状況に大きな差が生じていると推察される。

転倒経験が少なく、健康観が高い人ほどボランティア活動に参加している方が多い事が分かった。

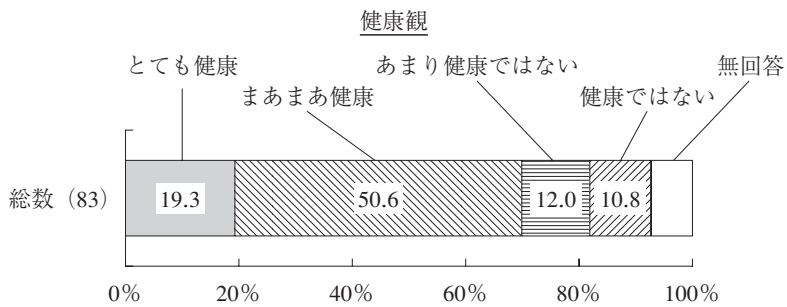
10) 地域活動



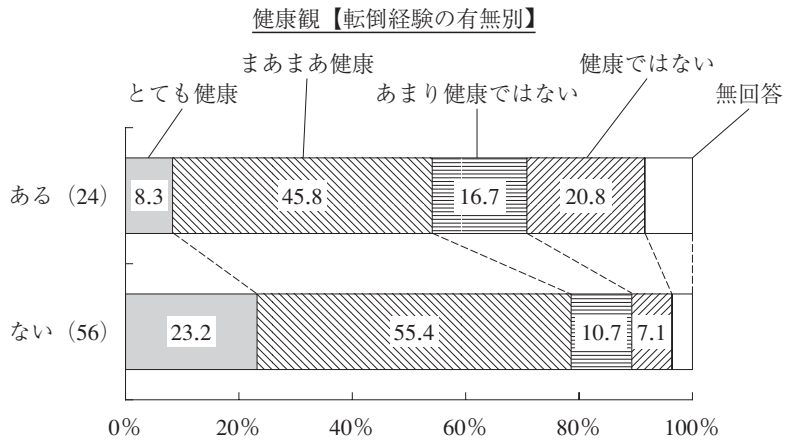
地域活動についてみると、「老人クラブ」「自治会」の割合がともに30%を超え、突出して高い。これらに「祭り・行事」(9.6%)、「サークル・自主グループ」(6.0%)が続いている。比率は高いが、自治会や老人クラブへの参加が30パーセントというのは都市部と比べても低い。

8. 健康について

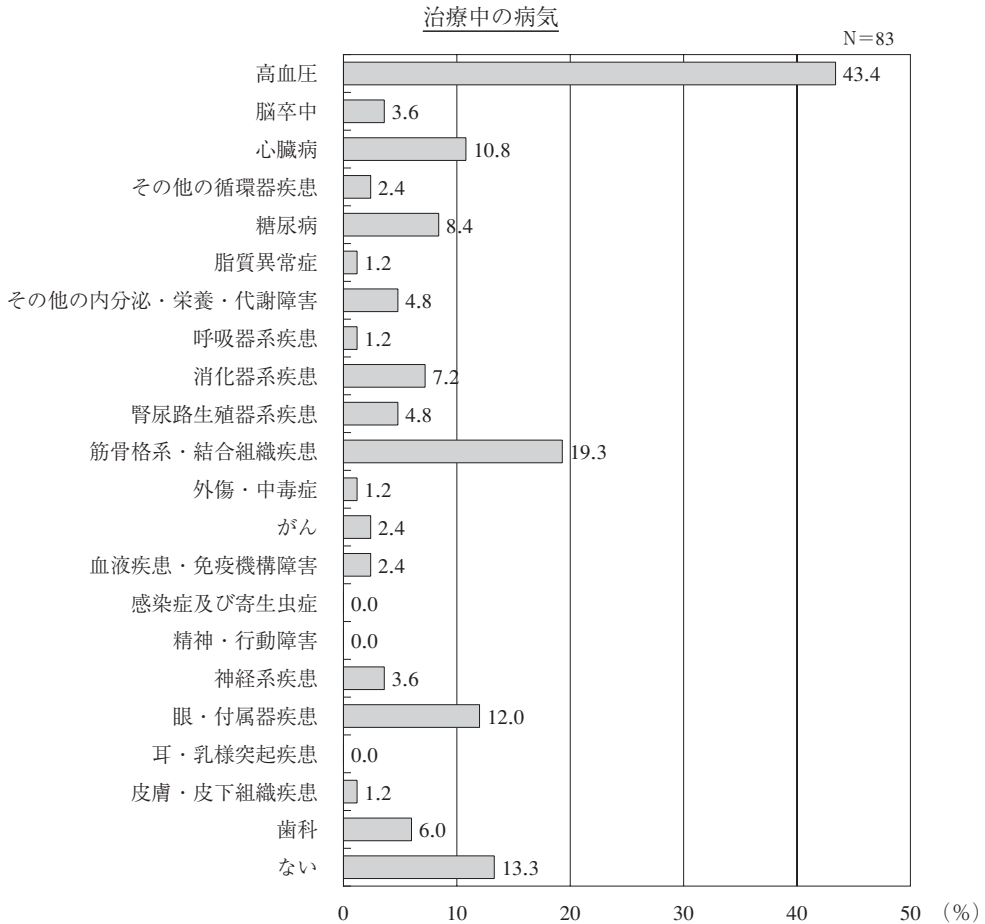
1) 健康観



自分自身の健康観についてみると、「とても健康」と答えた方が19.3%、「まあまあ健康」の方が50.6%であり、健康と感じている方の割合は約70%を占めている。

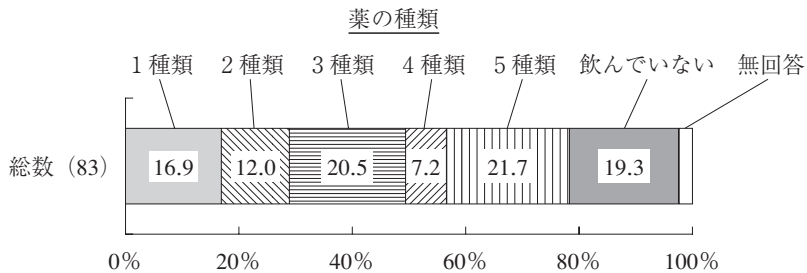


転倒経験の有無別にみると、健康と感じている方（「とても健康」+「まあまあ健康」）の割合は、転倒経験のない方のほうがある人より25%近く上回っている。転倒の経験は、健康観の低下につながっているとみられる。



治療中の病気についてみると、高血圧が43.4%で最も高く、これに筋骨格系・結合組織疾患が19.3%、眼・付属器疾患が12.0%で続き、高齢者に多い疾患が上位に来ている。また、「ない」と回答した方が13.3%にすぎず、8割以上の方が何らかの病気にかかっていると推察される。

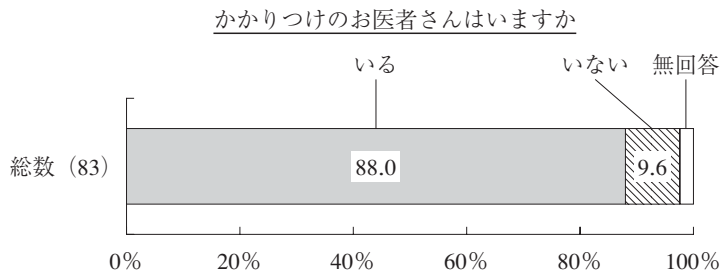
2) 薬の種類



薬の服薬状況を見ると、飲んでいない方は19.3%であり、約8割の方が何らかの薬を服用しているとみられ、半健康状態にある方が多いと推察される。

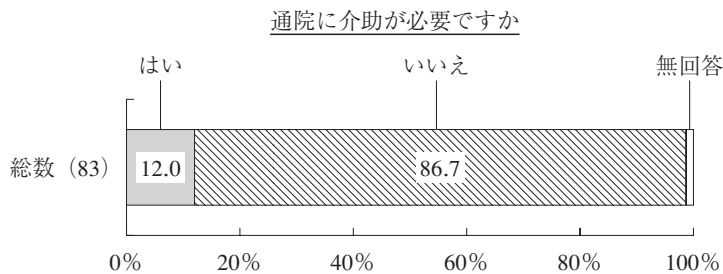
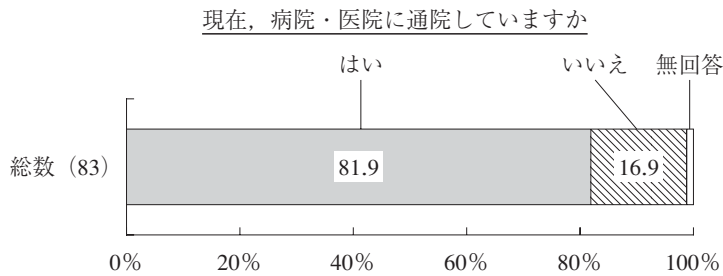
薬の種類は、5種類の方の割合が21.7%で最も高く、ほぼ半数の方が3種類以上の薬を服用している

3) かかりつけ医の有無



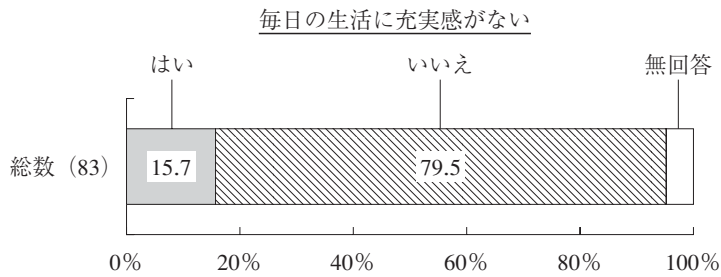
かかりつけ医の有無についてみると、かかりつけ医がいる方は88.0%を占めている。

4) 通院状況

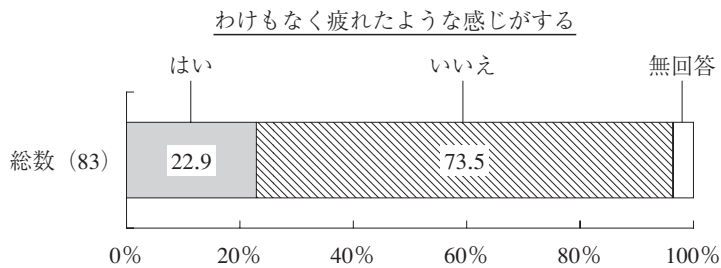
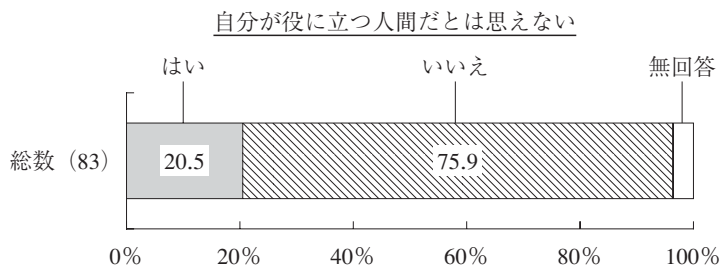


通院状況を見ると、現在、病院・医院に通院している方は81.9%を占め、通院に介助が必要な方は12.0%である。

5) 精神状況



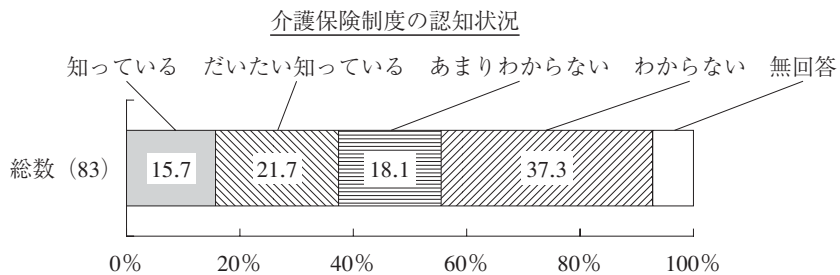
精神状況をみると、毎日の生活に充実感がない方は15.7%である。



自分が役に立つ人間だとは思えない方が20.5%、わけもなく疲れたような感じがする方が22.9%である。聞き取り調査をした方の中にも数人にうつ状態が疑われる方が認められ、10～20%くらいの方が鬱傾向にあると推察される。

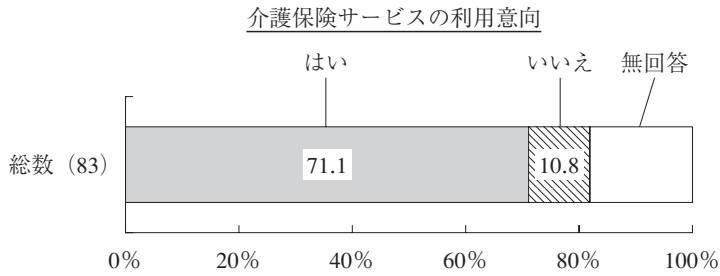
9. 介護保険について

1) 介護保険制度の認知状況

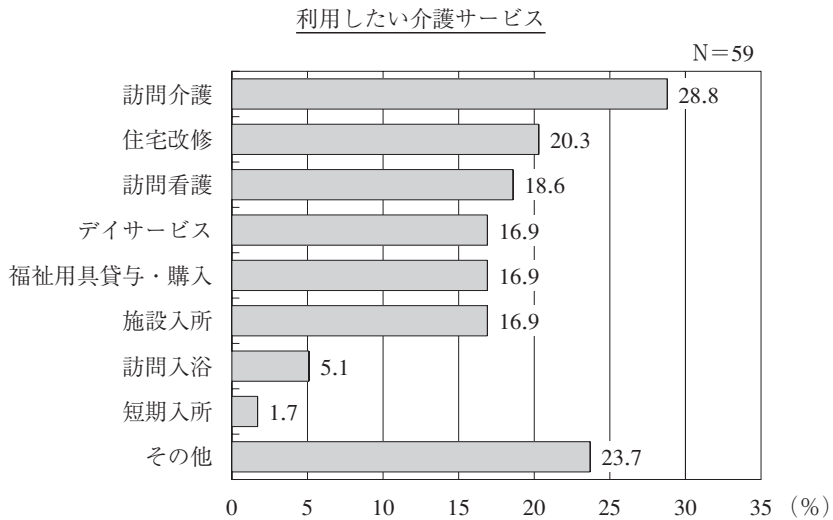


介護保険制度の認知状況についてみると、介護保険制度を知っている方が15.7%、だいたいい知っている方が21.7%であり、ほぼ4割近い方が介護保険制度を認知しているとみられる。

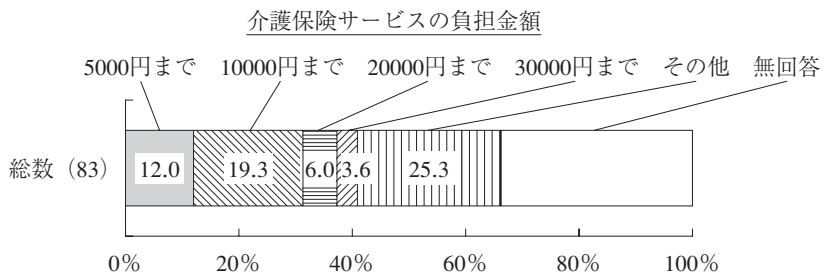
2) 介護保険サービスの利用意向



介護保険サービスの利用意向についてみると、意向を持っている方が71.1%を占めている。



利用意向のある方に利用したい介護サービスについて調査したところ、「訪問介護」が28.8%で最も高く、これに「住宅改修」(20.3%)、「訪問看護」(18.6%)、「デイサービス」(16.9%)、「福祉用具貸与・購入」(16.9%)、「施設入所」(16.9%)……と続いている。

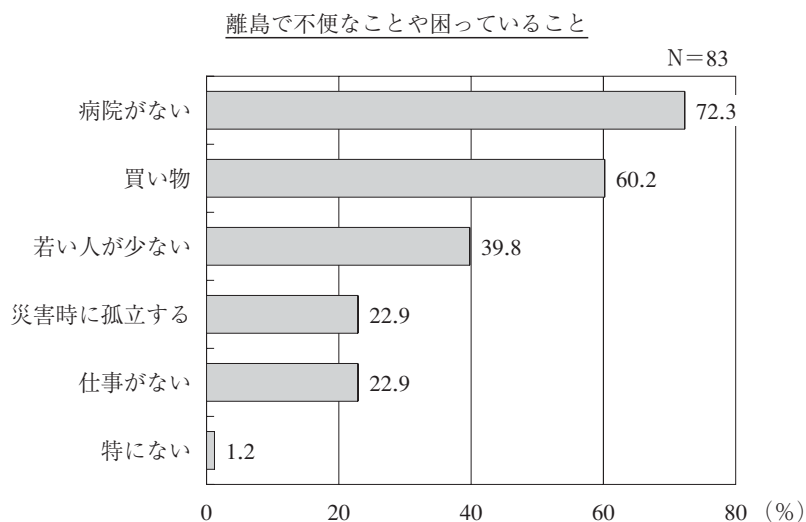


また、介護保険サービスの負担金額についてみると、10000円/月までの方が約3割を占めている。

介護保険への意見

- 離島だけに適用する制度があるのか？
- 国民年金だけで入所できる施設を。
- 以前親の介護をしていたが、制度が使いづらい。介護4・5は総合的な介護を考えて欲しい。
- 保険料の年金天引きがづらい。
- 保険料負担がづらい。
- 収入が無い人も保険料を支払うのか。
- 保険料が高い。
- 国民年金で入れる安い施設をつくってほしい。
- 制度がわからない。
- 使わないのに保険料の負担がある。

10. 離島で不便なことや困っていること



離島で不便なことや困っていることについて調査したところ、「病院がない」が72.3%で最も高く、医療過疎の状況に不便を感じている人が多い。これに「買い物」が60.2%で続き、島内に商店が1軒しか無く、且つその店の品揃えが少ないため、ほとんどの方が鶏方や和具といった島外に出かけなくてはならないことに不便を感じている人が多いようである。また、これらに「若い人が少ない」(39.8%)、「災害時に孤立する」(22.9%)、「仕事がない」(22.9%) ……と続いている。

一方、「特にない」方は1.2%にすぎず、ほとんどの方が何らかの不便を感じている状況が窺われる。

その他の意見

医療へのニーズ (21)

- 病院行く末も大変
- 夜中に急病になった際、親戚が少ないし、もし何かあればどうすれば良いか、それが一番不安です。
- 今は特に困らないが、先は不便になる(病院、買い物)。
- 救急車が来ない。
- 急病など何かあった場合に船がない。
- 救急の時に困る。
- 急病で夜など天気の良いときには、一人で生活している方のことが心配。
- 離島であり、夜に病気になった時のために看護師を間崎において欲しい。
- 救急の場合、間に合わない。
- 自分は救急の時の協力をしているが、急病で病院を動かすことができないとき、救急隊を乗せに行くことがある。この場合、間崎と賢島を何往復もしなければならず大変。また、協力者は数人いるが、夜になると酒を飲んでいて出られないこともしばしばあり、誰でも使える救急艇が必要。
- 病気になった時に困る。
- 夜に急病になった場合が困る。夜だけでも看護師がいれば助かる。
- 自分が倒れたときにどうすればいいかわからない(一人暮らしの人)。
- 夜の救急の時に間に合わない。
- 急病の時、風が強いときに船で渡るのが大変である。
- 夜、何かあったとき(病気など)困る。
- 妻が救急車を2回呼んだが、親戚が無い家は困るであろう。
- 救急車がない。
- 救急の時に困る。
- 一人暮らしなので自分で医者や買い物に行かれるときはいいが、行けなくなったら困る。
- 一人暮らしの足腰の悪い人が船に乗って病院へ行くこと。

交通へのニーズ (16)

- 船の時間が少ない。
- 船の乗り降りが困難(買い物に出ても少ししか持てない)
- 船がないとどこへも行かれない。
- 船で出ることが不便。(鶴方に家があるので先で鶴方に行く)
- 巡航船の本数が少ない。
- 巡航船乗り場の改修をお願いしたい。
- 自治会で管理するので、誰でも夜に使える船を配備して欲しい。(救急艇に拘らない)
- 定期船が少ない。
- 夜、船で帰るときなど暗くて大変である。
- 船に乗るときの介助が欲しい(棧橋の手摺りなど)。
- 巡航船の乗り降りがつらい。
- 巡航船が少ない。電車と連絡がない。
- 船の本数が少ない。
- どこかへ行くときに船に乗らなければならない。
- 船に乗っていくことが大変。
- 棧橋の使用料を無料にしてほしい。

買い物へのニーズ (7)

- 夫婦共に高齢であり、店を長くやっていかれない。昨年、やめようと思ったが、年寄りからやめられたら困ると言われ、縮小してやっている。仕入れは夫が週1～2回磯部へ行っている。
- 歳をとったときに買い物が困る。
- 店が無くなってしまうと困る。
- 商店が無くなったら不便である。
- 西井商店が無くなったときに困る。
- 売っているものが高いし、古い。
- 西井商店で全て揃わない。

地域連携へのニーズ (5)

- 一人暮らしの人の生活が可哀想です。
- 自分は和具から間崎に来たため、よそ者という意識がある。
- 話し相手がいない。
- 島内ではレクリエーションや楽しみがない。
- 市から委託されてスクエアステップを行っても人が集まらない。

福祉へのニーズ (3)

- 配食サービスがあればいい。
- 小学校の代替施設を普段介護施設として使えるようにしてほしい。
- デイサービスが無くなった。保育所を無くして、デイサービスをやめるのは市も補助が必要。やめるのが早すぎる。

その他 (4)

- 雨の日、車が横付けにならない。
- 今の仕組みでは不都合がある。
- 汲み取りに対する補助があるが、申請を要するため、高齢者が申請を忘れる。制度を考える場合は、そういうことも考慮に入れて、使いやすいものにしてほしい。
- 不便に慣れているので、困るという気持ちはない。

ま と め**1. 生活状況**

間崎島の島民の現在の暮らしの状況を見ると、「苦しい」と回答した方が36.1%、「やや苦しい」と回答した方が28.9%であり、大半の方が生活に苦しさを感じながら暮らしているとみられる。

仕事についてみると、現在、収入のある仕事をしている方は43.4%で半数を下回っている。半数以上の方が収入のある仕事をしておらず、それが生活に苦しさを感じながら暮らしている方が多いことにつながっていると推察される。

2. 運動・閉じこもりについて

階段の昇降についてみると、階段を手すりや壁をつたわずに昇っている方が47.0%で半数に満たない。今回の調査で面談した方々では、高齢のせいもあり、階段の昇降に関して特に降りる時が辛いという声が多く聴かれた。

また、仕事をしていない方でも畑へ出かける方が多い。しかし、その一方で日中に外に出るのが嫌いで、ほとんど外に出ないという方もみられ、こういった方々は、今後、更に足腰が弱くなることが懸念される。

外出の状況についてみると、週に1回以上外出している方は81.9%を占めている。これを転倒経験の有無別にみると、週に1回以上外出している方の割合は、転倒経験のない方がある方を10%以上上回っている。

買い物の頻度をみると、週1日未満の方の割合が41.0%、週1日の方が12.0%であり、半数以上の方が週1日以下の外出にとどまっている。島内に商店が1軒あるものの、品揃えが少なく、ほとんどの方が鞆方や和具に出かけたときに必要なものを買っている。また、島外に住む子どもが買ってきてくれるという人や隣の人に頼むという人もあり、島内の商店の少なさが、買い物の頻度の少なさに影響しているとみられる。

外出する際の移動手段は、「徒歩」「巡航船」の割合がともに55%前後で高く、「自分の船」が45.8%で続いており、船が主たる移動手段になっていることがわかる。

3. 日常生活について

外出、買い物、食事、洗面や歯磨き、トイレなどの日常生活については、いずれも自力でできている方が多く、現在のところ大半の方が自立して生活できているとみられる。しかし、足腰の機能低下がみられる人も多く、数年先には要介護者が増える可能性が高い。

4. 健康について

健康状態についてみると、「とても健康」の方が19.3%、「まあまあ健康」の方が50.6%であり、自身を健康と感じている方の割合は約70%を占めている。

これを転倒経験の有無別にみると、健康と感じている方（「とても健康」+「まあまあ健康」）の割合は、転倒経験のない方がある方を25%近く上回っている。転倒経験の有無は、健康に対する意識に影響を与えていると推察される。

一方、治療中の病気についてみると、高血圧が43.4%で最も高く、これに筋骨格系・結合組織疾患が19.3%、眼・付属器疾患が12.0%で続き、高齢者に多い疾患が上位に来ている。また、「ない」と回答した方が13.3%にすぎず、8割以上の方が何らかの病気にかかっていると言える。

続いて薬の服薬状況を見ると、薬を飲んでいない方は19.3%であり、約8割の方が何らかの薬を服用しているとみられ、半健康状態にある方が多いと推察される。飲んでいる薬の種

類は、5種類の方の割合が21.7%で最も高く、ほぼ半数の方が3種類以上の薬を服用している

次に精神状況をみると、毎日の生活に充実感がない方は15.7%である。自分が役に立つ人間だとは思えない方が20.5%、わけもなく疲れたような感じがする方が22.9%である。聞き取り調査をした方の中にも数人にうつ状態が疑われる方が認められ、10~20%くらいの方が鬱傾向にあると推察される。

5. 社会参加について

相談相手についてみると、「息子・娘」「配偶者」「兄弟・姉妹」といった身内を挙げた方が多い。地域活動は、老人クラブ、自治会がともに約30%、祭り・行事は10%に満たない。地域から孤立している人が多く、地域連携の希薄化が進んでいるとみられる。

6. 間崎島における今後の課題

間崎島の島民は、現在は健康とは言えないまでも生活に支障がない方が多い。しかし、足腰の機能低下がみられる人も少なくはなく、数年先には要介護者が増える可能性が高い。今後、更に高齢化が進むに伴い、重病者・急病者の増加、寝たきり者の増加が予想される。

この点において離島で不便なことや困っていることとして「病院がない」を挙げた方が7割を超えている。通院通所の頻度は、週1日未満の方の割合が約7割。現在月に一度、志摩市の中心部に位置する鵜方の開業医がボランティアで訪問診察を実施してくれているが、これらの方々のほとんどが月1回程度この開業医へ薬をもらいに行く人とみられ、ほとんどの島民がこの開業医に頼って治療を受けている状況である。その他の意見をみても医療へのニーズについて挙げた方が21名で最も多く、島民の多くが医療過疎の状況に不便や不安を感じていると言える。

今後、高齢化の進展によって重病・急病の方が増えたり、寝たきりになる方が増えるに伴い、(緊急)医療に対するニーズが益々高まると考えられ、島内の医療機関の整備、もしくは急病時に本土へ患者を救急搬送できる体制の整備など早急な対策が求められる。

また、このままでは独居の高齢者が増え、引きこもり、ひいては孤立死の増加も予想される。聞き取り調査をした方の中にも数人にうつ状態が疑われる方が認められた。地域から孤立している人も多くみられたことから、更なる地域連携の強化に向けた対応及び精神保健対策が求められるところである。

(2013年4月1日受理)

Elderly Support and Self-Esteem in a Marginal Village

ISHIDA Yasunori

KOYANAGI Takaaki

KAWAI Takako

FUKUYAMA Masakazu

The population in farming and fishing villages of Japan had started to decline since the 1990s. This paper shows the process that transformed one village leading to marginalization, using the case of Masaki-Jima, a distant island located in Shima, Mie Prefecture, Japan. Masaki-Jima, had developed through its pearl industry, having over 600 residents in the 1950s. As the sea around the island became polluted, the skilled laborers left. This brought the end of the pearl industry in the Bay of Ago along with its tourism industry. As a result, over 80% of the island population is now over 65 years old; and half of the 100 houses there are vacant. The only youth in the island now are 2 junior high school students, a brother and a sister. Their parents, in their forties at the time of this study, are the next youngest residents. Almost all others are the elderly. In this environment, this study explored 1) the elderly's attitudes toward living using interview methods and 2) the elderly care conditions using survey methods. The reality of the island life makes it impossible for the elderly who need care to remain on Masaki-Jima. The findings 1) suggest that the vast majority of the elderly gave up on the future of the island—the development and recovery of the island by the younger generation. They accept the current whereabouts—natural disasters, diseases, and uneasiness for the lack of elderly care in the island - and are simply waiting for the day that they are unable to survive on the island. And 2) because of the lack of public elderly care on the island, the results show that many senior citizens take care of themselves. As many of them have already started having difficulty walking, in a few years, we can expect that they will leave the island. Those who have health conditions do not participate in the community meetings and activities any longer. They have infrequent communication with other islanders and rely on their children living off the island. This study clearly suggests that this marginal village will disappear unless we intervene with medical and public elderly care support for the island residents.